

常陸の後期古墳の様相

阿久津 久 片平 雅俊

はじめに

1. 後期前方後円墳の成立

2. 前方後円墳を含む古墳群と埋葬施設

3. 横穴式石室と箱式石棺

4. 横穴墓とその終末

ま と め

論文要旨

茨城県は6世紀前半頃になると霞ヶ浦を中心にした地域と、県西、県北の地域にそれぞれの特色が現れる。霞ヶ浦沿岸では、三昧塚古墳にみられるような箱式石棺を埋葬施設に使い始めてから、この地域は、箱式石棺が主流となり、後期前方後円墳、円墳に設置されている。このような系譜をもつ地域の中に、僅かであるが、前方後円墳では出島村風返稲荷山古墳、大師の唐櫃古墳（彩色壁画）、三昧塚古墳に近く沖洲古墳群に入る大日塚古墳、円墳では桜川村前山古墳には横穴式石室が設けられており、この地域での特殊性を示している。

一方、県西北部から県北にかけては、前方後円墳、円墳とも横穴式石室が主流となり、箱式石棺は少なくこれに横穴墓が加わる。前方後円墳に箱式石棺が使用されているのは久慈川流域にある大子町仲山3号墳にみられるが、この古墳群は、むしろ那須地域の影響を受けたものと考えている。

トータル的に分けた2つの地域のうち、後者の地域と筑波には、方墳に横穴式石室をもち、一部に壁画が描かれるものが7世紀前半頃に共通して現れる。新治国内では関城町船玉古墳（彩色壁画）、筑波国内ではつくば市佐渡ヶ岩屋古墳、那珂国内では水戸市吉田古墳（線刻壁画）がある。これに加えて勝田市虎塚古墳の横穴式石室のように後年に改装して彩色したものや、高国の日立市かんぶり穴横穴墓（彩色壁画）のように特異な性格をもつものがある。

この頃、国府がおかれた石岡市の南、千代田村の境に流れる恋瀬川を中心に群集墳が形成される。古墳形状は円墳、変形小型前方後円墳などバリエーションがみられ、箱式石棺が主体となっている。また、佐渡ヶ岩屋古墳のある平沢・山口地区には、円墳に横穴式石室と、箱形横穴式石室がみられ、この箱形横穴式石室は、新治村武者塚古墳、土浦市石倉山古墳の地下式箱形横穴式石室に共通するものである。この形状は千代田村粟田山群集墳にもみられる。

これらはいずれも7世紀後半にみられるもので、常陸国府が石岡の地におかれた素地をこの終末期の群集墳の中に求められるようである。

はじめに

茨城県における古墳及び古墳群の数は約1千ヶ所である。そのうち前方後円墳を含む古墳群の数は151群である。これらの古墳群を地域別にみていくと、霞ヶ浦沿岸は74群、久慈川流域では11群、日立市以北の海岸線沿いの地域では6群、那珂川流域では19群、利根川流域では6群、鬼怒川流域では9群、初現期の古墳が多くみられる桜川、恋瀬川、園部川流域は26群である。

古墳群の数が全体の約48パーセントを占めている霞ヶ浦沿岸は、海岸から直接内陸部に入ることのできる水上交通の便しさ、霞ヶ浦に流れ込む小河川によって形成された枝状の台地が複雑に入り組み、生活基盤である農業、谷水田の開発が容易にできる土地条件、内水面漁撈など多くの条件が備わっている所である。このような条件をもつ霞ヶ浦沿岸をはじめ各主要河川沿いには、6世紀後半から7世紀にかけて、大規模な古墳群、群集墳、横穴墓が形成されており、これらを展望しながら茨城県の後期古墳をみていきたい。

1. 後期前方後円墳の成立

4世紀代に築造された前方後方墳は、茨城県の最初の高塚墳墓として確認されている。5世紀に入り大型前方後円墳が主要な地域に築造された頃には、県内各地が整備され、安定した豪族支配が見られるようになり後期古墳文化を迎えている。6世紀初頭、霞ヶ浦沿岸の沖洲の低地に三昧塚古墳が造られている⁽¹⁾。これまで、茨城県にみられる古墳の多くは、台地上に造られるのが常であり、霞ヶ浦沿岸でも例外はない。しかし、三昧塚古墳は湖水面との比高差約2メートルの低地で、砂層の上に形成している。古墳を形成している沖洲の背後には、10～20メートルの標高をもつ台地が広がっており、東に1キロの台地上には、初期に造られた前方後方墳である勅使塚古墳をはじめとして、7世紀初頭までに形成された沖洲古墳群（前方後円墳4基、円墳6基）がみられ、ひとり三昧塚古墳だけが立地を異にしている。

三昧塚古墳は全長85メートル、前方部幅40メートル、後円部径48メートル、前方部高さ6メートル、後円部高さ8メートルの前方後円墳で、墳丘は三段の層序で築造されている。墳丘を囲む堀は2メートルほどの深さで、幅90メートル、長さ130メートルの範囲で認められ、堀の外側を周庭帯が巡っていた可能性がある。墳丘には三重に円筒埴輪、形象埴輪が巡らされている。一重は墳丘裾を巡り（調査で確認できたのは南側裾で、1列に人物埴輪、動物埴輪が6、7個並んでいたものだけである）、一重は前方部と後円部が繋がる高さに巡り、一重は後円部墳頂である。なお、前方部には2列の埴輪が後円部まで並ぶ。

埋葬施設は後円部中央に箱式石棺と木棺を並列して置いている。木棺は副葬品を入れるだけのもので、戟1、大刀1、刀子1、鉄鏃160本以上、短甲1組、挂甲1組、衝角付冑1組、鉄斧1、

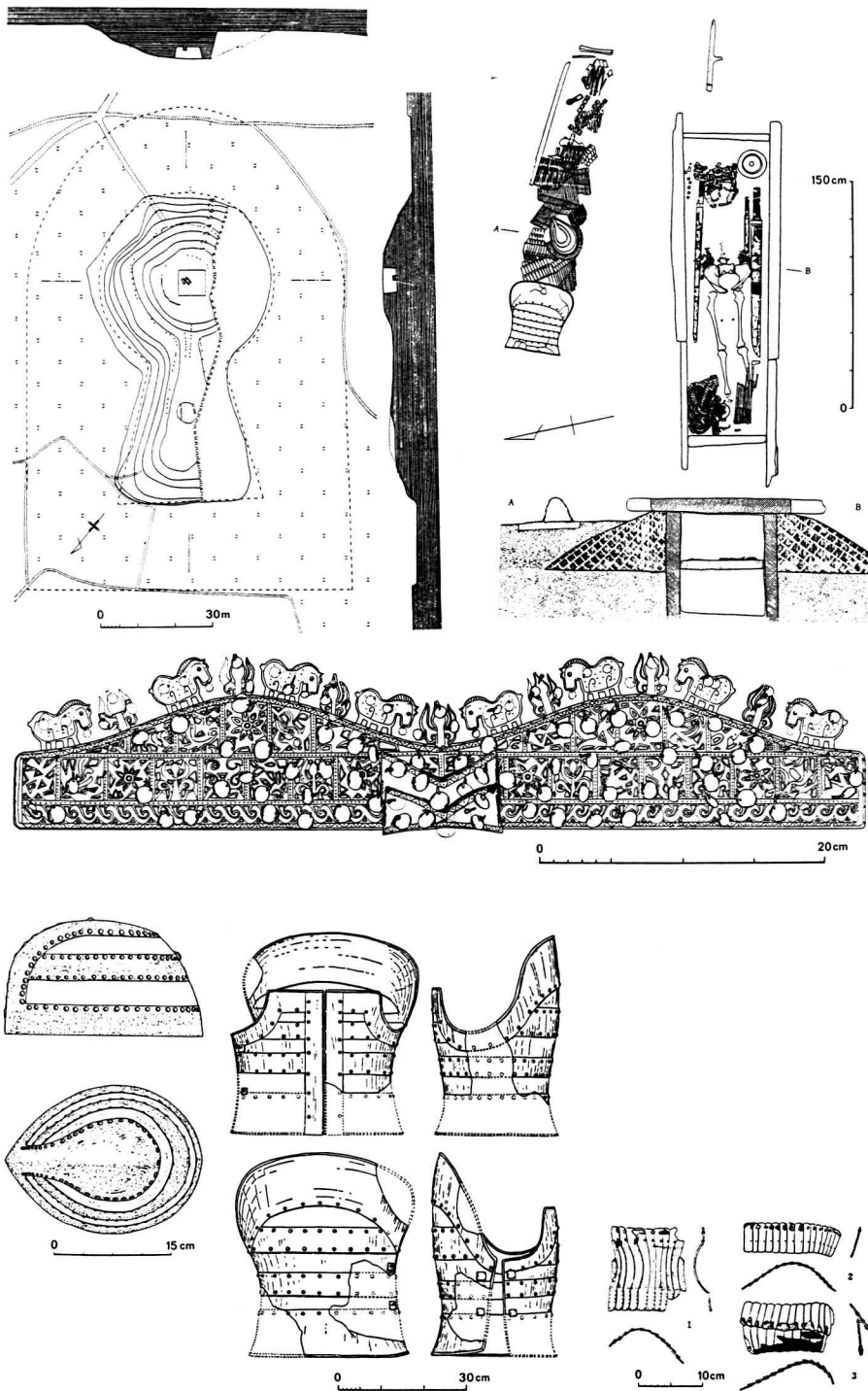


図1 三味塚古墳の墳丘平面図と出土遺物

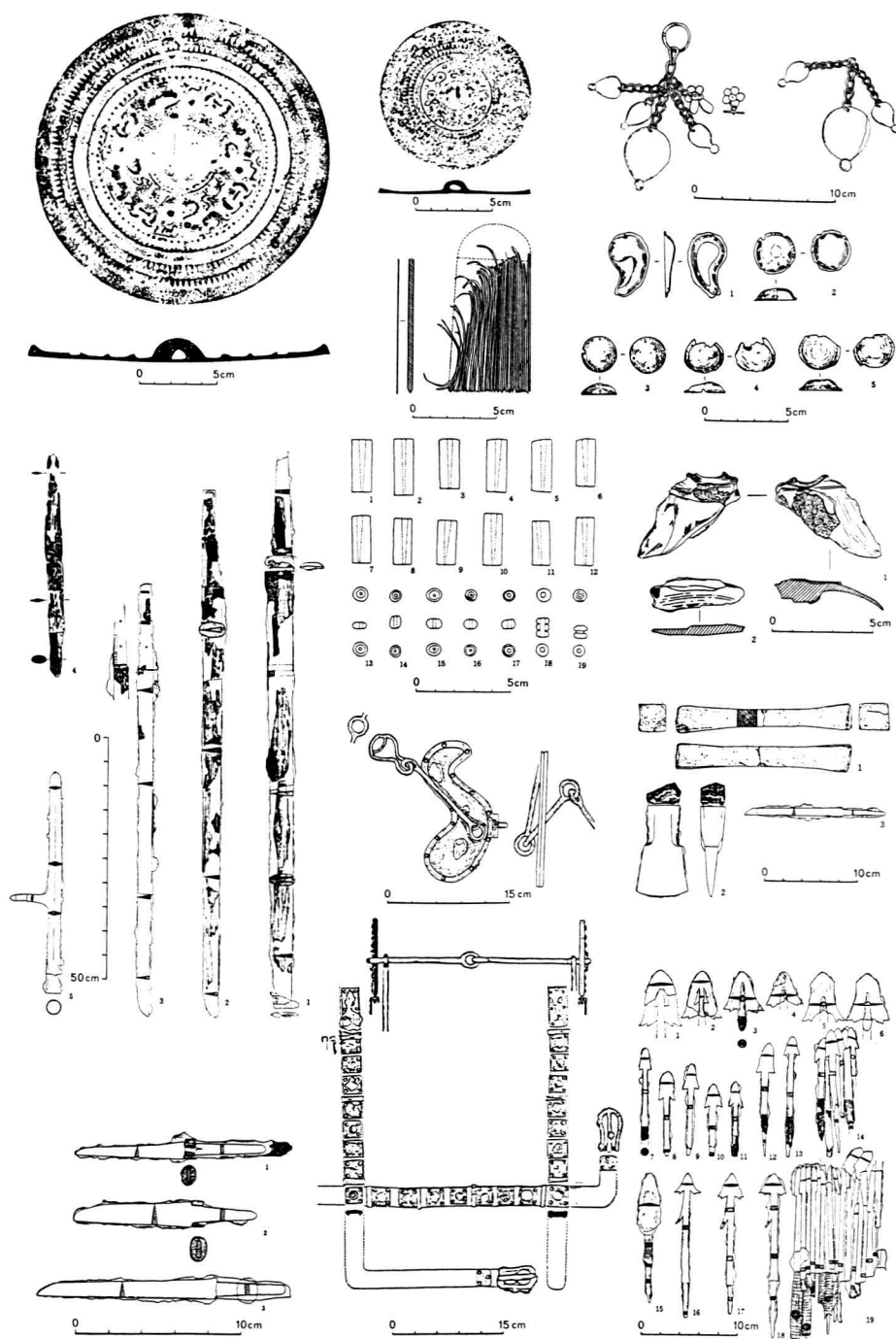


図2 ①三味塚古墳の出土遺物

轡鏡板 1, 面繫飾り金具 1 括, 砥石 1 が収められていた。

箱式石棺には伸展葬された成人骨の上やまわりに副葬品が置かれている。残っている人骨頭骨には金銅製馬形飾付透彫冠がつけられ、頭骨の周囲には緑黄色の綿状質のものがみられ、枕が置かれていた可能性がある。両耳の位置には金銅製垂飾付耳飾があり、頸部付近には碧玉製管玉 12 個、手首の位置には丸玉 468 個、小玉が 1,792 個、貝釧が散在している。頭部の左側には銅鏡（平縁変形神獸鏡, 変形乳文鏡）が置かれ、遺骸の両側には大刀 2 振りと剣 1 振りが添えてある。

三昧塚古墳の造営は、当地方における後期古墳の成立に深く関わりをもっている。従来、古墳は支配階級の象徴的構造物として造られたもので、畿内地方に造られた大王の墳墓に似たものを願望することで、地方豪族の権力を誇示しようとするものである。このような観点から、5 世紀中ごろに築造された各地の大型前方後円墳には、畿内地方にみられる前方後円墳の形状、大きさが参考となったであろうことは想像できる。

畿内地方を中心とした大型前方後円墳が、設計プランに基づいて築造されていることについての研究は、古墳群を含めた地理的条件を踏まえて進められている。ここでは諸氏の研究成果は省くとして、堅田直氏がおこなった設計プランの分析を参考にして、当地方に 5 世紀中ごろに成立している大型前方後円墳の設計プランを検討した上で、6 世紀以降に築造された前方後⁽²⁾円墳と対比してみる。

茨城県で 5 世紀中ごろに造られた大型前方後円墳は、石岡市舟塚山古墳（全長 182 メートル）、常陸太田市梵天山古墳（全長 151 メートル）、水戸市愛宕山古墳（全長 136.5 メートル）、つくば市八幡塚古墳（全長約 90 メートル）、下館市芦間山古墳（全長約 100 メートル）などがあげられる。これらの古墳はいずれも埋葬施設は確認されていないが、墳丘からは埴輪が出土している。

県内で最大規模の舟塚山古墳に、堅田プランを当てはめてみると図 3-1 のように、直径の等しい二つの円が主軸線上で接点をなし、 $AC = CO = OF = FP = PE = EB$ の前方後円墳になり I 型に分類される。このプランは奈良県ウナベ古墳に近似している。梵天山古墳は I 型に分類されるが、地形の制約を受けたため、直径の等しい 2 つの円が主軸線上で交わるが、前方部の両裾の位置を狭めて円内に納め、長さは円の半径を $1/3$ 短くすることによって辛うじて裾を台地

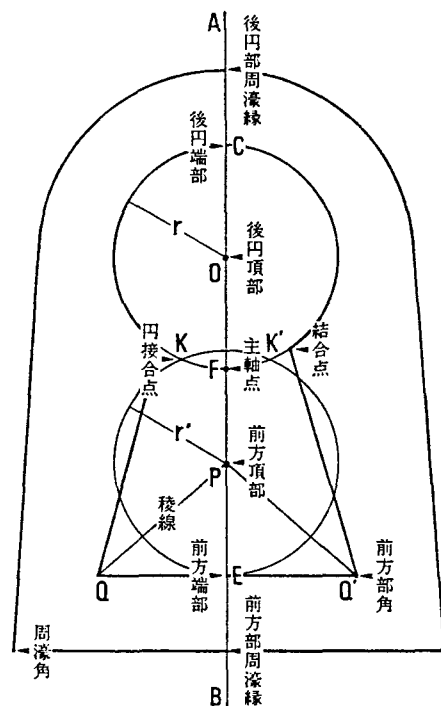


図2 ②前方後円墳の各部名称と記号

内に納めることができたようである (図3-4)。愛宕山古墳は直径の等しい2つの円が主軸線上の3等分点を通して交わる形をもちⅡ型になる。このプランは奈良県磐之媛命陵古墳と同じである (図3-3)。中期古墳の代表的なものを抽出してみたが、時期が明らかでないが舟塚山古墳と同一プランをもつものに出島村瓢塚 (富士見塚) 古墳がある。しかも、ほぼ舟塚山古墳の1/2のスケールである (図3-2)。

後期古墳をみていくにあたり、後期古墳の特性といわれる埋葬施設の多様性、副葬品では馬具・須恵器の出現等を一つの指標とした。設計プランは墳丘実測図のなかで、周濠を含めたものを使いたかったが、必ずしもそれに見合うものはなく、やむをえず墳丘のみであるが、埋葬施設が明確なものを使用した。それぞれの条件に合わせて分類すると、Z-1-前方後円墳・箱式石棺・埴輪、Z-2-前方後円墳、横穴式石室・埴輪、Z-3-前方後円墳・横穴式石室に分けることができる。

Z-1は三昧塚古墳と玉里村舟塚古墳を例とする (図4-1, 2)。

三昧塚古墳はⅡ型に分類される。このプランは愛宕山古墳と同じ規格をもつが、前方部の両袖の取り方が多少異なる。愛宕山古墳では墳丘の主軸線上のそれぞれのOPを中心として円を描くとそれぞれの半径の1/2で交差する(OF⁻)。この長さが墳丘長になる。前方部の両裾(QQ⁻)は、愛宕山古墳ではOPを半径とした円に納まっているが、三昧塚古墳はOF⁻の1/2に交点があり、その分だけ愛宕山古墳より前方部幅を短くしている。

舟塚古墳はⅠ型に分類される。直径の等しい2つの円が主軸線上で接点があるが、前方部の両裾を決める円はOFの3分の2にOF⁻の交点がある。括れ部の位置はOFの1/3に交点をもつ。周濠は墳丘裾に沿ったもので規格性は失われている。墳丘に限ってみれば大阪府御廟山古墳に近似する。

Z-2は八郷町丸山4号墳と東海村舟塚1号墳を例とする (図4-3, 4)。

丸山4号墳、舟塚1号墳とも同一寸法によるⅡ亜型に分類され、奈良県別所大塚古墳に類似する。両古墳は直径の等しい2つの円が、主軸線上で互いの中心点O、Pで交わり、墳丘全長を形成する。前方部の両裾はCP間の1/4の円周上にのる。

Z-3は勝田市虎塚古墳を例とする (図4-5)。当古墳はⅡ型に分類され、兵庫県雲部車塚古墳に類似する。

後期古墳の代表的なものを分類別に表出したが、Z-1に分類されるものは明らかな差異がみられる。県内の同種の古墳を概観すると、多くは舟塚古墳のプランに近いもので、三昧塚古墳のプランの前方部が未発達なところは、梵天山古墳の前方部のとり方に類似するが、全体のプランは愛宕山古墳の設定に類似する「折衷型」である。

三昧塚古墳の設計プランは、墳丘、周濠の割付からみると、中期的要素を具備しているが、さきに示したように、愛宕山古墳の前方部の裾(QQ⁻)のとり方と異なっている。OPの1/2の弧線上でQQ⁻を設定するのは、舟塚山古墳、瓢塚古墳にみられ、中期古墳の中心的な区割り方法

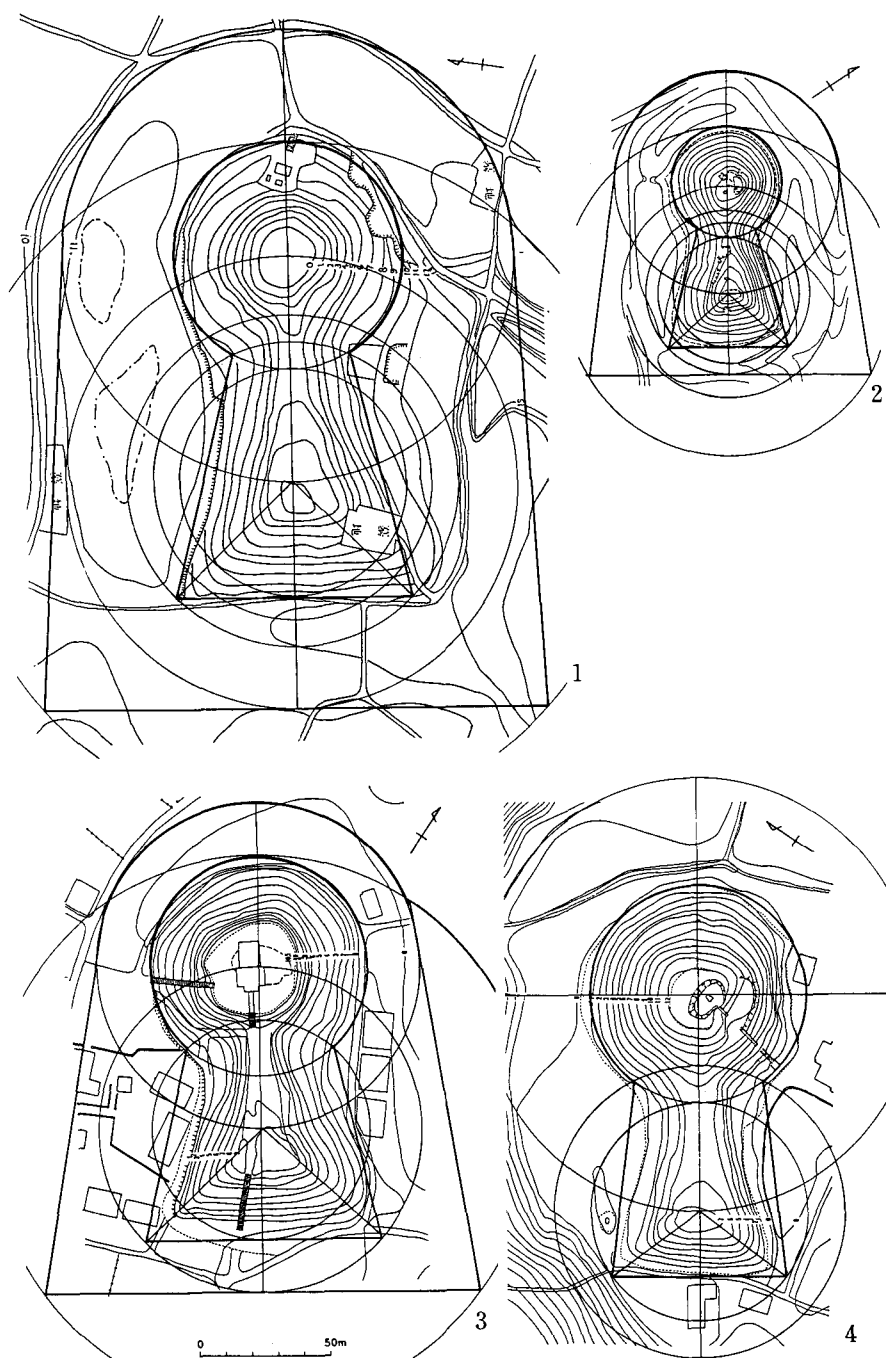


図 3 中期前方後円墳古墳の設計プラン

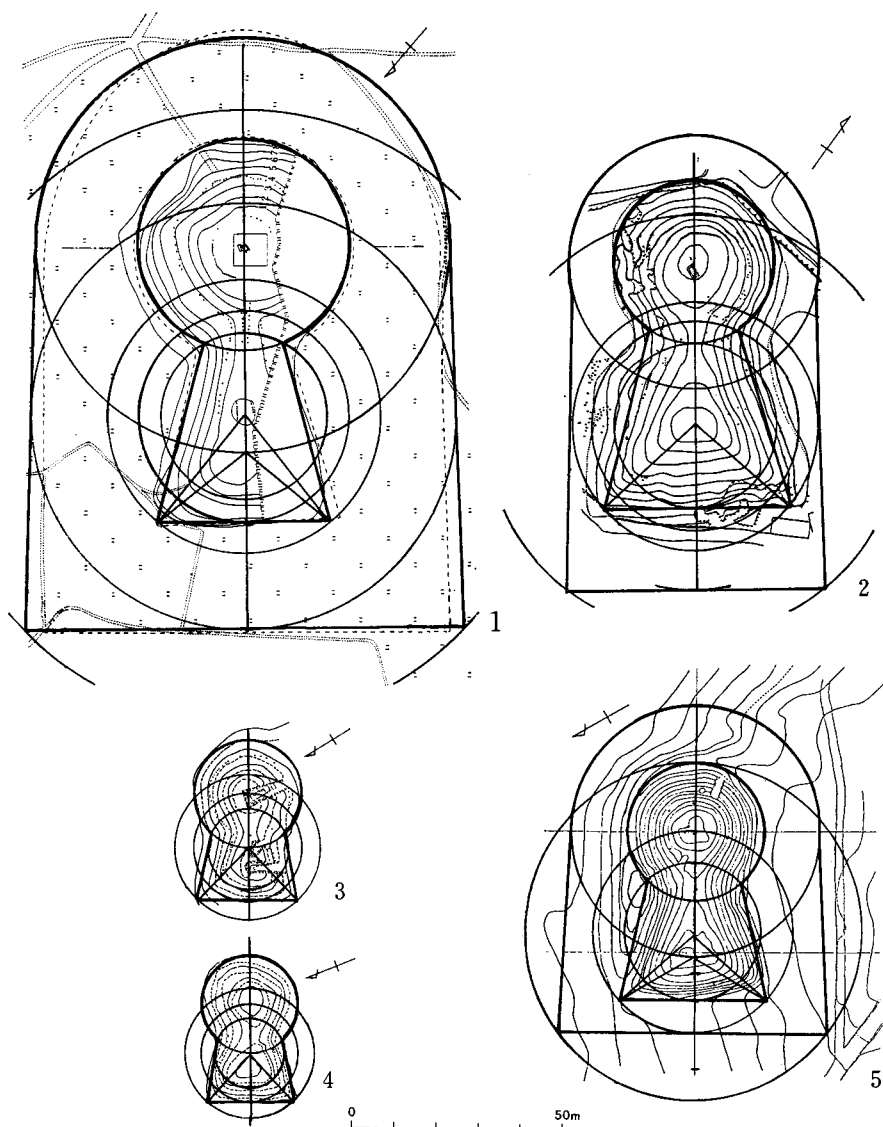


図4 ①後期前方後円墳古墳の設計プラン

であったと考えられる。

堅田氏の報告の中で、三味塚古墳の設計プランに近いものを捜すと、大阪府津堂城山古墳、仲津姫命陵古墳がほぼ同規格の古墳のようである。Q-Q'の設定は、O-F'の2/3のところにおいた弧線上にあり、三味塚古墳のQ-Q'幅よりは少しだけ広くなる。両古墳の周堀の主軸線上の位置はC-O（後円部半径）の約1/2の幅で設定しているのに対し、三味塚古墳はC-O幅で設定している。

設計プランを通じて、県内では唯一の畿内型の構造をもつ三味塚古墳墳丘の成立の背景をみてきたが、当古墳の埋葬施設・副葬品の特殊性を考えると、ここに埋葬された首長者は、在地系豪族ではなく、大和朝廷とのつながりをもつ新興豪族の支配を想定できる。この古墳を築造した首

長者が、他の地域とどのような関わりをもっていたかについては、周辺部にみられる同時期以降の前方後円墳には、特徴として現れているものはなく、先に示した代表的な後期前方後円墳を含めて、それぞれの地域の特徴を示しながら展開しているため明らかにすることはできない。

2. 前方後円墳を含む古墳群と埋葬施設

後期前方後円墳がどのように終末期まで展開しているかについては、各地域の古墳群の様相を分析しなければならないが、ここでは後期以降に形成された代表的な前方後円墳を含む古墳群を国別にみると次の通りになる。

表1 国別にみる前方後円墳を含む古墳群

国 名	古 墳 群 名 (墳形基数)	施設	副 葬 品 (文献)
高 国	1 北茨城市天王塚古墳群 (前1, 円1)	□	埴輪, 金環
	2 高萩市赤浜古墳群 (前3, 円11)	□■	(3)
	3 多賀郡十王町藁島台古墳群 (前1, 円24)	■	直刀
久自国	4 日立市甕の原古墳群 (前2, 円6)	□■	(4)
	5 日立市西大塚古墳群 (前1, 円3)	●	埴輪, 直刀, 馬具
	6 常陸太田市稲木古墳群 (帆1, 円4)	□■	埴輪, 直刀, 鏡, 玉類, 五鈴鏡
	7 常陸太田市幡山古墳群 (前1, 円23)	□■	(5)
	8 那珂郡大宮町岩崎古墳群 (前1, 円18)	■	
	9 “ 瓜連町新宿・上宿古墳群 (前1, 円6)	□■	直刀, 刀子, 玉, 銅環
	10 “ 東海村舟塚古墳群 (前2, 円2)	□	直刀, 鉄鏃, 玉, 馬具, 須恵器
	11 “ “ 真崎古墳群 (前1, 円11)	□	直刀, 馬具, 釧, 鉄鏃, 玉類
仲 国	12 勝田市三反田古墳群 (前2, 円7)	□	直刀, 銅釧, 鉄鏃, 埴輪
	13 “ 虎塚古墳群 (前1, 円6)	□	(6)
	14 “ 笠谷古墳群 (前1, 円7)	□■	埴輪, 直刀, 馬具
	15 “ 津田古墳群 (前1, 円17)	■	
	16 東茨城郡常澄村森戸古墳群 (前3, 円9)		埴輪, 管玉
	17 “ 内原町田島古墳群 (前3, 円22)		
	18 “ “ 牛伏古墳群 (前7, 円8)		埴輪
	19 “ “ 杉崎古墳群 (前1, 円3)		
	20 “ 桂村高根古墳群 (前1, 円7)	□	直刀, 蕨手刀, 鉄鏃
	21 那珂湊市磯崎古墳群 (前1, 円116)	■	(7)
	22 鹿島郡鉾田町西山古墳群 (前1, 円6)	■	
	23 “ “ 餓鬼塚古墳群 (前6, 円2)	■	
	24 “ 大洋村二重作古墳群 (前3, 円17)	■	
	25 “ “ 梶山古墳群 (前9, 円18)	■	直刀
	26 “ 鹿島町宮中野古墳群 (前7, 円35)	□■	埴輪, 直刀, 鉄鏃
茨城国	27 石岡市染谷古墳群 (前1, 円12)	■	
	28 “ 石川古墳群 (前5, 円7)	■	
	29 新治郡千代田村大塚古墳群	■	(8)
	30 “ “ 松延古墳群	■	(9)
	31 “ “ 四万騎古墳群 (前2, 円13)	■	
	32 “ 新治村高崎山古墳群 (前5, 円10)	■	埴輪, 直刀, 刀子, 勾玉

国 名	古 墳 群 名 (墳形基数)	施設	副 葬 品 (文献)
	33 新治郡新治村台古墳群 (前4, 円10)	■	
	34 " 八郷町丸山古墳群 (前1, 円4)	□	(10)
	35 " 出島村八幡古墳群 (前1, 円15)	□	
	36 " " 風返古墳群 (前1, 円6)	□	(11)
	37 " " 野中古墳群 (前2, 円16)	□■	
	38 " 玉里村舟塚古墳群 (前1, 帆1, 円1)	□■	(12)
	39 " " 愛宕塚古墳群 (前2, 円4)		
	40 行方郡麻生町権現山古墳群 (前6, 円12)		
	41 " " 南古墳群 (前2, 円7)	●	
	42 " 牛堀町横須賀古墳群 (前6, 円3)		
	43 " " 観音山古墳群 (前4, 円1)		(13)
	44 " 潮来町稲荷山古墳群 (前3, 円4)		
	45 " " 大生東古墳群 (前4, 円60, 方2)	■	(14)
	46 " " 大生西古墳群 (前5, 円34)	■	
	47 " 北浦村堂目木古墳群 (前1, 円7)		
	48 " 玉造町沖洲古墳群 (前4, 円6)	■	(15)
	49 " " 諸井古墳群 (前1, 円3, 方6)		
	50 " " 鳥名木古墳群 (前4, 円5)		
	51 稲敷郡江戸崎町値の台古墳群 (前1, 円4)		
	52 " 美浦村舟子塚原古墳群 (前1, 円7)		
	53 " " 木原台古墳群 (前2, 円3)		
	54 " 新利根村狸穴角崎古墳群 (前5, 円1)		
	55 " 桜川村人形墳古墳群 (前1, 円5)		
	56 " 東村東大沼古墳群 (前4, 円30)		
	57 " " 福田古墳群 (前6, 円22)		
筑波国	58 筑波郡谷田部町面の井古墳群 (前1, 円27)	■	(16)
	59 土浦市ヒサゴ塚古墳群 (前3, 円1)		
	60 " 尖塚古墳群 (前4, 円14)	■	(17)
新治国	61 笠間市四所神社境内古墳群 (前1, 円1)		埴輪, 須恵器
	62 西茨城郡岩瀬町花園古墳群 (前1, 円5)	□	(18)
	63 真壁郡大和村青木古墳群 (前1, 円14)		(19)
	64 " 関城町上野古墳群 (前3, 円5)	■	(20)
	65 結城市林・上山川古墳群 (前5, 円20, 方1)	△■ ●	(21)
	66 結城郡千代川村芝崎古墳群 (前2, 円1)	■	
	67 " 石下町神子埋古墳群 (前1, 円65)	■	(22)
	68 猿島郡総和町向原古墳群 (前1, 円2)	■	
	69 " 三和町五十塚古墳群 (前3, 円19)	■	(23)
	70 " 境町大塚山古墳群 (前5, 円3)		

□横穴式石室 ■箱式石棺 △粘土槨 ●堅穴式石室

ここにあげた古墳群は、いずれも6世紀に入ってから形成されたものであるが、1例だけ34丸山古墳群だけが、前期古墳を含んでいる。このことは、後期古墳の特徴の1つとしてあげられている初現的な横穴式石室をもつ前方後円墳が含まれているためにあえて表記した。

茨城県内の後期に形成された前方後円墳を含む古墳群の特徴をみると、多くは仲国、茨城国に

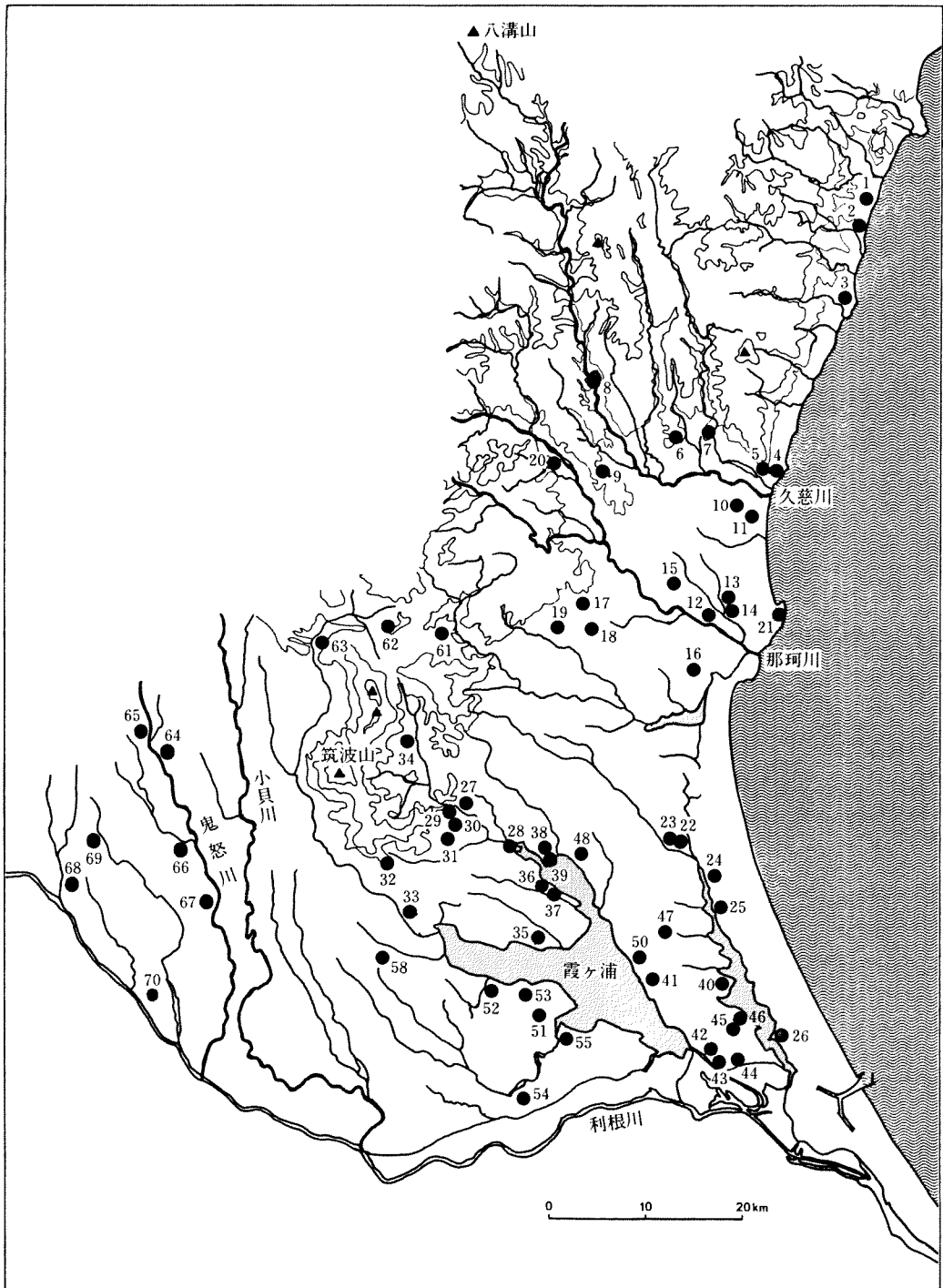


図4 ②前方後円墳を含む古墳群の分布図

集中している。これらの状況は、生活の基盤となる霞ヶ浦沿岸や、それに連結する各河川が、社会構成上重要な意味をもっていたことが背景としてあったことを裏付けている。このことは、前期古墳の分布の中にも現れており、後期に入って勢力分野が拡大したことと、分化が行われたことを示している。しかも分化を示すものとして国別にみられる前方後円墳の埋葬施設のなかに、横穴式石室をもつものと、三昧塚古墳に設けられた箱式石棺が継続的にみられるものがあり、これらの分布は地域的な特徴として位置づけられる。

横穴式石室を設けている前方後円墳は、6世紀中頃から後半にかけて形成されたもので、北からみていくと、4甕の原古墳群の六ツヶ塚古墳、9新宿・上宿古墳群の権現塚古墳、瓜連町十林寺古墳群の十林寺古墳、10舟塚古墳群の舟塚1号墳、13虎塚古墳群の虎塚古墳(彩色壁画)、14笠谷古墳群の笠谷18号墳、勝田市大平古墳群の大平古墳⁽²⁴⁾、34丸山古墳群の丸山4号墳、36風返古墳群の稲荷山古墳、37野中古墳群の大師唐櫃古墳(彩色壁画)、近年確認された十日塚古墳(彩色壁画)⁽²⁵⁾、48沖洲古墳群の大日塚古墳(帆立貝形古墳)があげられる。これらの古墳が分布している地域をみると、海岸線寄りか、それを結ぶ河川流域か、霞ヶ浦のもっとも奥まった地域にのみみられ、しかも、非常に遍在していることがわかる。国別にみると久自国の広い範囲、仲国の一部の地域、茨城国の一部の地域である。茨城国にある丸山4号墳が、1基だけ離れてみられるのは、この古墳の横穴式石室が茨城県で最初につくられたことに起因するものと思われる。当古墳は全長35メートルの前方後円墳で、明治27年に石室から多くの副葬品が出土したと伝えられており、その中に滑石製模造品があったとされているが、現在は所在がわからず明らかでない。もし模造品が含まれていたとするならば、比較的古老位置づけられるとしている。この横穴式石室に続くものとして大日塚古墳が考えられており、霞ヶ浦湖岸から恋瀬川流域の共通した文化相を示すものである。

地域の特徴は、横穴式石室の石材が異なることはもとより、石材の組み方の違いに現れている。久自国は凝灰岩、砂岩の切り石積みのもので多く、玄室が前室と後室に分けられた構造がみられる。六ツヶ塚古墳は羨道、前室は切り石積みであるが、後室は板石で組まれている。仲国は凝灰岩の板石を組んだもので、副室はみられない。茨城国は雲母片岩の板石が使われ、6世紀中頃につくられたとされている大日塚古墳の横穴式石室は、単室で大型の1枚石が使われており、当地域では希有のものである。多くは箱式石棺の延長上にあるような組み方をしており、玄室内が板石で複数に区画されている。この傾向は当地域から筑波国にかけて顕著にみられる。

前方後円墳にみられる横穴式石室は、6世紀後半には円墳に多く採用されているが、石室をもつ前方後円墳を含む古墳群に必ずしも造られるのではなく、円墳のみで形成されている古墳群にみられるのが特徴である。しかも、前方後円墳にみられる分布とは必ずしも一致していず、新たな地域の中で形成されている。

前方後円墳の埋葬施設として、横穴式石室が少ないということは茨城県の後期古墳の特徴としてあげられるが、前方後円墳の調査が少ないこともあり、ここで断定することはできない面もあ

る。しかし、6世紀初頭に造られた三昧塚古墳、中頃に造られた玉里村舟塚古墳にみられる箱式石棺の存在は、いずれも副葬品が豊富であることと、三昧塚の初期的な埴輪列、舟塚の完成された埴輪列からみても、当地域の埋葬施設の主流は箱式石棺にあったことを示すものと考えている。このことは、古墳群の多くは箱式石棺が主流であることと、7世紀に入ってから造られる、これまで変則的古墳とされていた小型前方後円墳の埋葬施設が、いずれも箱式石棺であることもこの辺の事情を語っているような気がする。

3. 横穴式石室と箱式石棺

後期前方後円墳の成立過程において、墳丘の形態の問題と共に、埋葬施設における特徴を示したが、県内の古墳群の数が約1千群として、前方後円墳を含む古墳群の数はその15パーセント程度である。これらの中で、埋葬施設が明らかになっているものは、20～30パーセント程度であろう。6世紀後半から7世紀にかけてみられる円墳群、群集墳で確認されている埋葬施設を概略的にみていくと、5世紀段階にみられた木棺直葬、粘土槨は一部に残るものの、6世紀に入ると三昧塚古墳にみられるような、長持形石棺を想定できる組合せ式箱式石棺が出現し、それより少し遅れて横穴式石室が現れる。箱式石棺は地域の石材との係わりで、組み方は異なるものの組合せ式箱式石棺が主流となるが、希に凝灰岩を使用する地域で幡山10号墳にみられるようになり抜き形舟形石棺がある。また、一部の地域では横穴式石室と箱式石棺を折衷した箱式形横穴式石室がみられる。

横穴式石室 横穴式石室の初期は、6世紀前半頃の前方後円墳に現れ、筑波山より北辺の地域に広がる傾向を示している。しかも、前方後円墳を含む古墳群には余りみられず、むしろ限られた地域の中ではあるが、円墳を主体とする古墳群の中に主体的に現れる。6世紀終末から7世紀に入ると、虎塚古墳群にみられるように一部の地域に辛うじて残されているに過ぎない。円墳を主体とする古墳群の中で、横穴式石室を主体としているものを選んでみていくと次のようになる。

那珂郡大宮町一騎山古墳群は10基以上の円墳からなる古墳群で、凝灰岩の切り石で組まれた横穴式石室が3基、粘土槨1基（前方後円墳）が確認されているが、残りは耕作によって埋葬施設を確認していないが、凝灰岩の切り石が散乱していることから横穴式石室があと数基はあった可能性⁽²⁶⁾がある。

表2 大宮町一騎山古墳群の埋葬施設

	埋 葬 施 設	平面形	副 葬 品
1号墳	横穴式石室？		鉄鏃，鐔，須恵器
2号墳	無袖式横穴式石室	矩形	直刀，須恵器杯，土師器坏
3号墳	無袖式横穴式石室	矩形	直刀，鉄鏃，切子玉，ガラス小玉，棗玉
4号墳	粘土槨		直刀，鉄鏃，管玉，ガラス小玉，埴輪（円，朝，形）

常陸太田市幡山地区は、台地一帯に前方後円墳1基、円墳23基、横穴墓3群百数十基からなる一大墓跡群である。このうち埋葬施設が確認されているのが14基で、凝灰岩の切り石で組まれた両袖形横穴式石室3基（この中のうち28号墳の玄室は岩盤である凝灰岩をそのまま1枚の板石で組み込んだようにくり抜いており、天井石、玄門、羨道は切り石で組んでいる。なお玄室には中央に仕切りを設け、横穴墓にみられる棺座を位置づけ、床には小さな河原石を敷き詰めている）、片袖形横穴式石室1基、無袖形横穴式石室6基、凝灰岩の箱式石棺4基、このうち2基は16号墳の墳頂に2基がTの状態に配置されたものである。前方後円墳には凝灰岩のくり抜き形舟形石棺が置かれ、副葬品は直刀、刀子、鉄鏃が出土している。

表3 常陸太田市幡山古墳群の埋葬施設

	埋葬施設	平面形	副葬品
1号墳	未調査		
2号墳	箱式石棺?		刀子
3号墳	無袖形横穴式石室	矩形	金環、鉄鏃、馬具
4号墳	無袖形横穴式石室	矩形	鉄鏃
5号墳	両袖形横穴式石室	胴張矩形	直刀、馬具、鉄鏃、玉類、埴輪
6号墳	横穴式石室?		
7号墳	無袖形横穴式石室	矩形	直刀、勾玉、丸玉、小玉、土玉、須恵器
8号墳	箱式石棺		刀子
9号墳	両袖形横穴式石室	胴張副室	直刀、単鳳柄頭、鉄鏃、刀子、勾玉、丸玉、棗玉
10号墳	くり抜き形石棺		直刀、刀子、鉄鏃
11号墳	片袖形横穴式石室	矩形	
12号墳	無袖形横穴式石室	矩形	直刀、金環、小玉
13号墳	無袖形横穴式石室	矩形	刀子、金環、小玉
16号墳	箱式石棺2基		刀子、鉄片、管玉、丸玉
28号墳	両袖形横穴式石室	矩形	須恵器壺、杯

真壁郡協和町寺山古墳群は10基の円墳からなり、埋葬施設は鶏足山系から産出する安山岩系の風化した切り石を使った横穴式石室、竪穴式石室、箱式石棺がみられる。この古墳群の東側の谷津向いの台地に、丑塚古墳群があり、現在ゴルフ場内に保存されている。この古墳群はいずれも円墳であり、測量調査によると10基を数えることができる。埋葬施設はいずれも明らかでない。

表4 真壁郡協和町寺山古墳群の埋葬施設

	埋葬施設	平面形	副葬品
I号墳	両袖形横穴式石室	矩形	直刀、鉄鏃、刀子、鉄鉾、鉄斧、農具、馬具、装身具
III号墳	両袖形横穴式石室	胴張矩形	直刀、鉄鏃、刀子、装身具
IV号墳	無袖形横穴式石室	胴張矩形	直刀、鉄鏃、刀子、馬具、装身具
V号墳	片袖形横穴式石室	矩形	直刀、鉄鏃
VI号墳	無袖形横穴式石室	胴張矩形	
VII号墳	箱式石棺		鉄片
VIII号墳	横穴式石室		鉄鏃、刀子、馬具、装身具
IX号墳	竪穴式石室	矩形	直刀、鉄鏃、刀子、装身具
X号墳	箱式石棺	矩形	

つくば市（旧筑波郡筑波町）平沢・山口古墳群は、筑波山の南側にのびる支脈の山麓に造られている。平沢古墳群は方墳1基、円墳6～7基からなっており、円墳はいずれも丘陵裾に沿うように造られているが、方墳は1基だけ離れて丘陵の中腹に造られている。埋葬施設が確認されているのは、方墳と円墳3基だけであり、いずれも横穴式石室で雲母片岩の板石が石材に使われている。山口古墳群は円墳10基前後からなるが、多くは墳丘の破壊が著しく埋葬施設が確認されたのは4基だけである。確認された埋葬施設はいずれも横穴式石室で、1・2号墳のように花崗岩の割石で乱石積みをしたものと、雲母片岩の板石で組まれたものに分けられる。⁽²⁸⁾なお、平沢古墳群に含むものとして、丘陵裾から離れた台地上に中台古墳（円墳）があり、横穴式石室が畑の中に全貌をみせている。

表5 つくば市平沢・山口古墳群の埋葬施設

	埋 葬 施 設	平面形	副 葬 品
平沢1号	両袖形横穴式石室	T形副室	
2号	横穴式石室	箱形	
3号	両袖形横穴式石室	箱形副室	
4号	無袖形横穴式石室	箱形副室	
山口1号	両袖形横穴式石室	矩形	
2号	片袖形横穴式石室	矩形	
3号	横穴式石室	箱形	
4号	両袖形横穴式石室	矩形	

横穴式石室の系統 前方後円墳に設けられた横穴式石室と、円墳に設けられた横穴式石室の構造は、基本的には差異はなく、地域性及び、構築時期の差異によって石材の使い方の違い、組み方の違いがみられる。これまで確認できた横穴式石室を分類してみると次のようになる。

I型 乱石積み横穴式石室—安山岩、変成岩などの火成岩系や凝灰岩系の割石が使われている。両側壁の組み方は、1段目に比較的大きな石を並べ置きその上に割石を積んでいく方法と（1式）、部分的に大きな石を1段目に置き、その並びや上段に大小様々な割石を積む方法と（2式）、比較的均一な割石を積み上げる方法（3式）などがみられる。奥壁は1枚石が多くみられるが、偏平な大きい石を中心に割石を組み上げたものもある。I型に分類される石室は、副室構造のものはみられず、羨道の長短はあるものの羨道・玄室の組合せが主体となっている。しかし、平面構造をみると、玄室が無袖のもの（A類）、片袖のもの（B類）、両袖のもの（C類）、無袖で玄室が胴張りのもの（D類）の4類に分けることができる（第6・7図）。

A類—久慈郡里美村小森明神古墳⁽²⁹⁾（3式）、大宮町一騎山2号墳（1式）、3号墳（2式）16号墳（3式）、那珂湊市三ツ塚2号墳（2式）、水戸市十萬原A号墳（2式）、B号墳（3式）、協和町寺山V号墳（2式）

B類—友部町高寺2号墳（1式）、八郷町丸山4号墳⁽³⁰⁾、千代田村栗田石倉古墳、つくば市山口2号墳（1式）

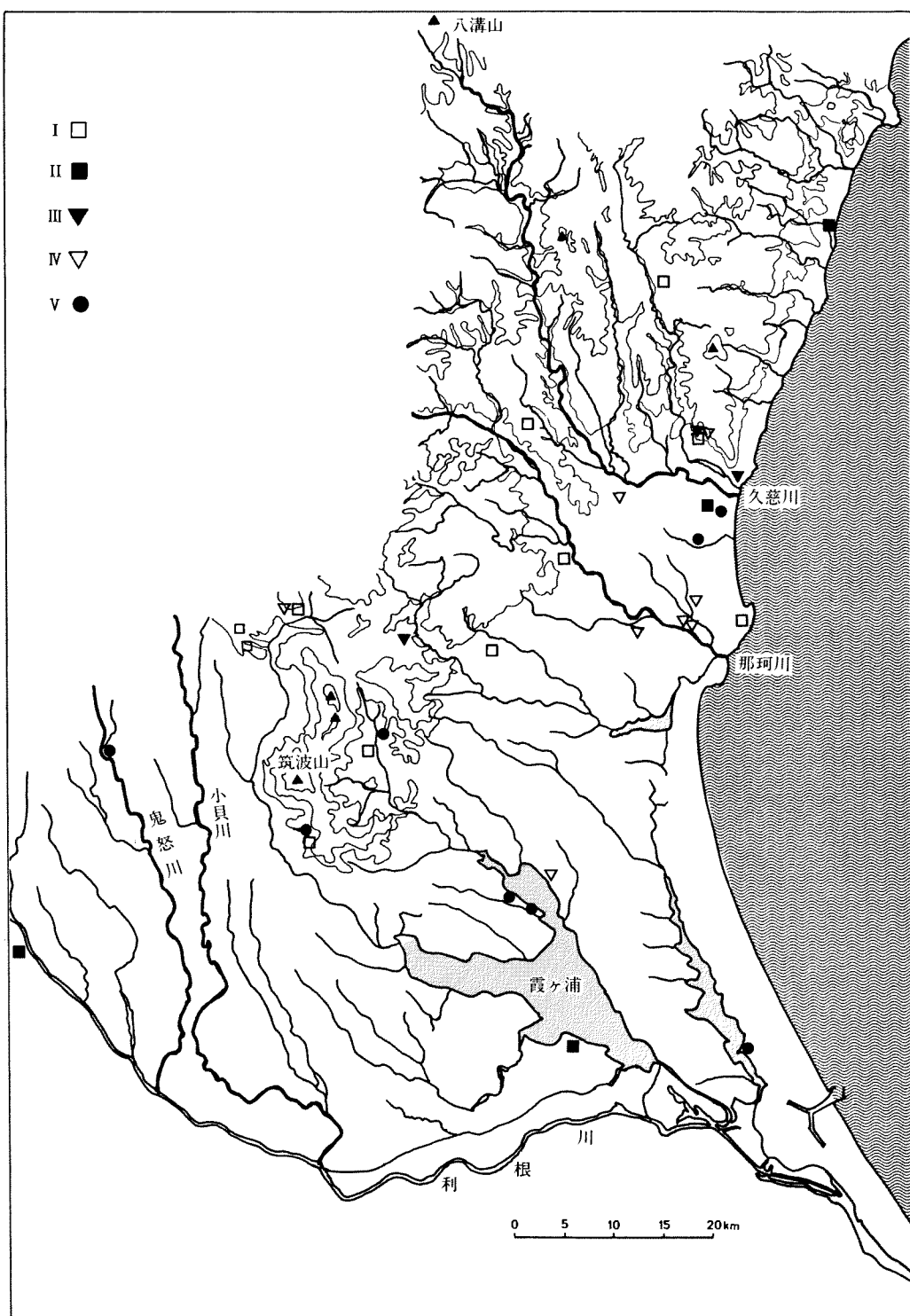


図5 横穴式石室型式別分布図

C類—常陸太田市幡山26号墳（2式）、協和町寺山Ⅰ号墳（3式）、つくば市山口1号墳（3式）、
2号墳（2式）

D類—岩瀬町間中1号墳（2式）、協和町寺山Ⅲ号墳（1式）、Ⅳ号墳（1式）、Ⅵ号墳（1式）、
の協和町古郡台原古墳（1式）⁽³¹⁾

Ⅱ型 切り石積み横穴式石室—砂岩質、凝灰岩などの加工しやすい石材を使用している。切り石加工方法は、凝灰岩では比較的大型の角材にしており、砂岩系ではサイコロ状のものと偏平状のものがみられ、小口積みの形態を示す。平面構造は乱石積みの形態と同じ様相を呈している（図8）。

A類—高萩市赤浜2号墳（1式）、稲敷郡桜川村前山古墳（3式）

B類—那珂郡東海村舟塚1号墳（1式）

C類—高萩市赤浜4号墳（1式）

D類—猿島郡五霞村穴薬師古墳（副室）（3式）

Ⅲ型 板石・乱石積み折衷形横穴式石室—凝灰岩質、花崗岩系の板石が使われており、両側壁の1段目に縦及び横にほぼ垂直におき、次の段からは割石を組み上げたもので、羨道部も玄室に近い組み方をしている。平面構造はA類の無袖形横穴式石室と、D類の胴張り形横穴式石室の2種

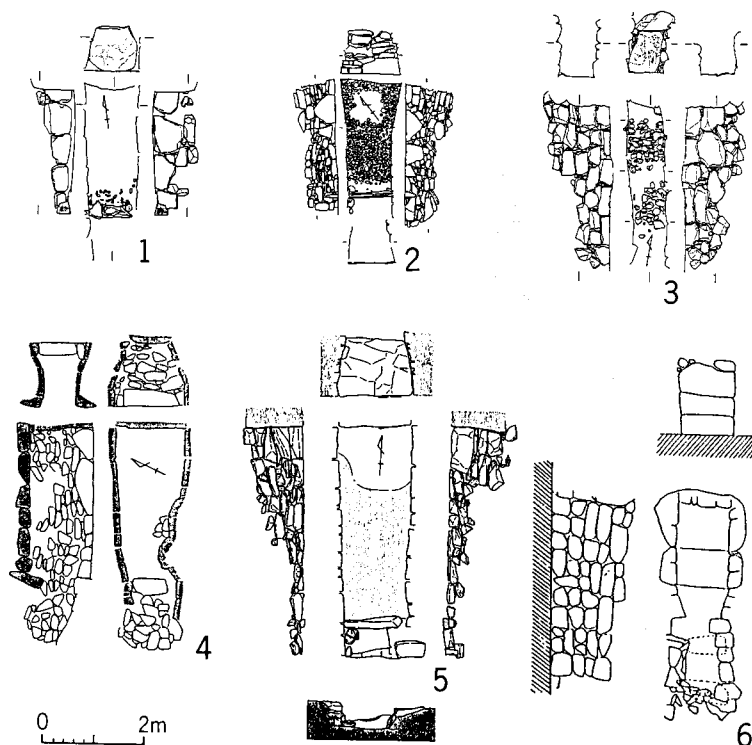


図6 横穴式石室Ⅰ型A類

1. 一騎山2号墳 2. 一騎山16号墳 3. 一騎山3号墳
4. 三ツ塚2号墳 5. 寺山Ⅴ号墳 6. 十万原古墳

類だけであるが、D類は右側壁は直線をみせるが、左側壁はI型D類の石の組み方と同じく、1段目に方形の切り石を置き、2段から上は乱石積みにしており、この側だけをわずかに湾曲させている(図8)。

A類一常陸太田市幡山14号墳、15号墳、日立市吹上2号墳(副室構造)⁽³²⁾、笠間市四所神社境内1号墳、2号墳

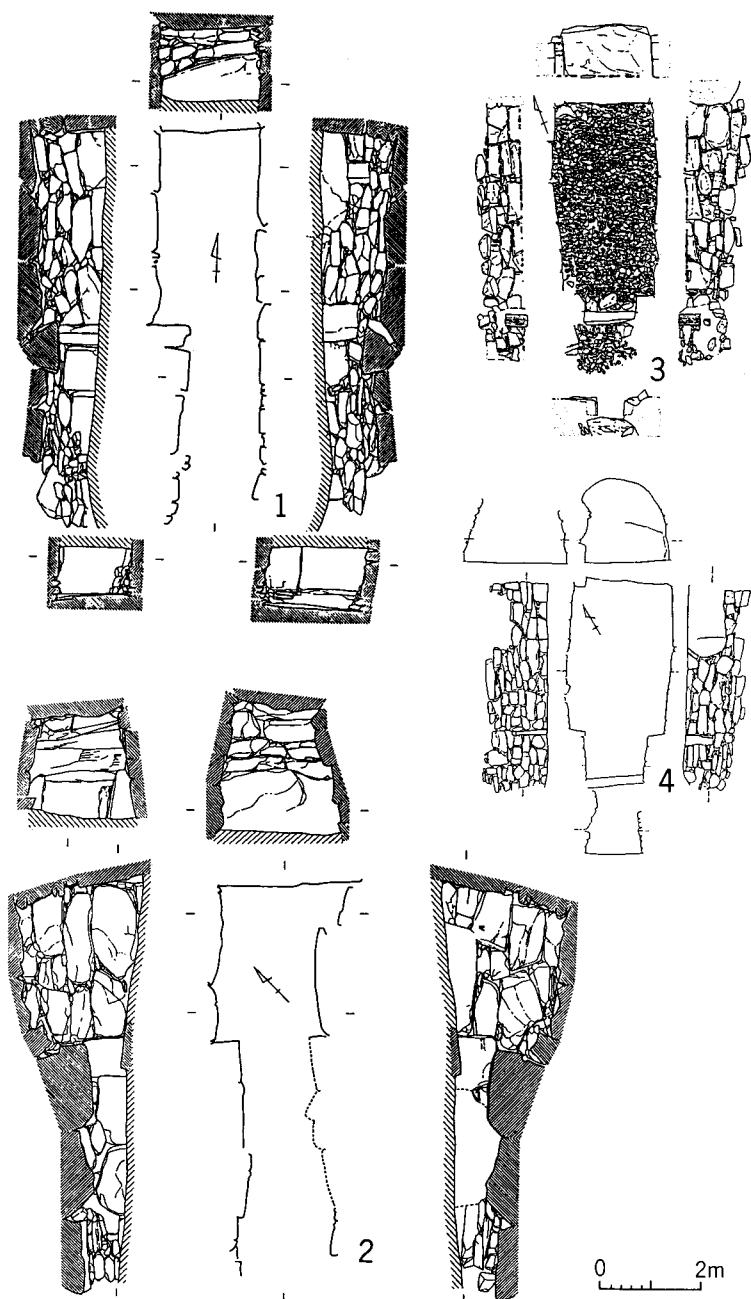


図7 横穴式石室I型B・C類

1. 山口2号墳 2. 山口1号墳 3. 寺山I号墳 4. 幡山26号墳

D類—常陸太田市幡山12号墳（副室構造）

IV型 板石台形組横穴式石室—凝灰岩の大きな板石を玄室の側壁に1枚ないしは2～3枚で台形状に組んだもので、羨道部は同型式のものと、切り石を積み上げたものに分けられる。この形式のものには、棺座、箱式石棺は組み込まれていない。1例だけ凝灰岩を板石にせず、基盤の凝灰岩層を掘り込んで同型式にしているものがあり、この特殊な方法で横穴式石室を造っているもの以外は、いずれも彩色か線刻による壁画古墳である。平面構造はA類の無袖形横穴式石室のものと、B類の片袖形横穴式石室と、両袖で玄室が胴張りの横穴式石室（D'）の3種類だけであるが、無袖のものの中には梁石と門柱石が羨道と玄室を仕切っているのがみられる（図9）。

A類—常陸太田市幡山24号墳、勝田市虎塚古墳（前方後円墳—彩色壁画）、行方郡玉造町大日塚古墳（帆立貝式）

B類—那珂郡那珂町白河内古墳（円墳—線刻壁画）、水戸市吉田古墳（方墳—線刻壁画）、西茨城郡岩瀬町花園3号墳（方墳—彩色壁画）

C類—勝田市金上谷津古墳（線刻壁画）

D'類—勝田市大平古墳（前方後円墳）

V型 板石箱形組横穴式石室—凝灰岩、雲母片岩などの板石を箱形に組んだもので、副室構造をもつものが多くみられる。玄室ないしは後室には箱式石棺が置かれるものもある。平面構造は1例を除いてA類の無袖形横穴式石室である（図9・10）。

A類—那珂郡東海村須和間7号墳、真崎10号墳（副室）、新治郡八郷町兜塚古墳（副室）、新治郡出島村大師の唐櫃古墳（前方後円墳—彩色壁画）、稲荷山古墳（前方後円墳—副室）、鹿島郡鹿島町宮中野99—1号墳、平沢1号墳（方墳—副室）、平沢3・4号墳（副室）

B類—真壁郡関城町船玉古墳（方墳—彩色壁画）

横穴式石室については、これまでに管見できたものを提示してみたが、この中で特徴的なものを挙げるならば、まず副室構造のものである。分類したものでみると、副室構造にしているものは、Ⅲ型A・D類、V型A類の3形態のものだけであり、いずれも両側壁を垂直に組んでおり、無袖のものが主体となっている。またこの形態のものは地域性はなく、広く海岸線に沿って点在しているのが特徴である。これらの横穴式石室は、今回報告されている駄ノ塚古墳の横穴式石室と一脈通じるものがあるが、いずれも円墳か前方後円墳にみられるもので方墳では平沢1号墳だけである。

海岸線から離れて、筑波山麓に形成している平沢1・3・4号墳の平面形状は副室構造になっているが、3・4号墳はいずれも小形であり、Ⅲ型にみられるような副室とは異なり、箱式石棺を仕切り石で区切るような構造をしている。1号墳は方墳で箱式石棺に横口を付けたような、T字形で組まれている。この形態は、一部の地域で横口式石郭（鹿島町宮中野古墳群大塚古墳—円墳）や、横口式箱式石棺（新治村武者塚古墳、土浦市石倉山9号墳）などに類型を求めることができる。

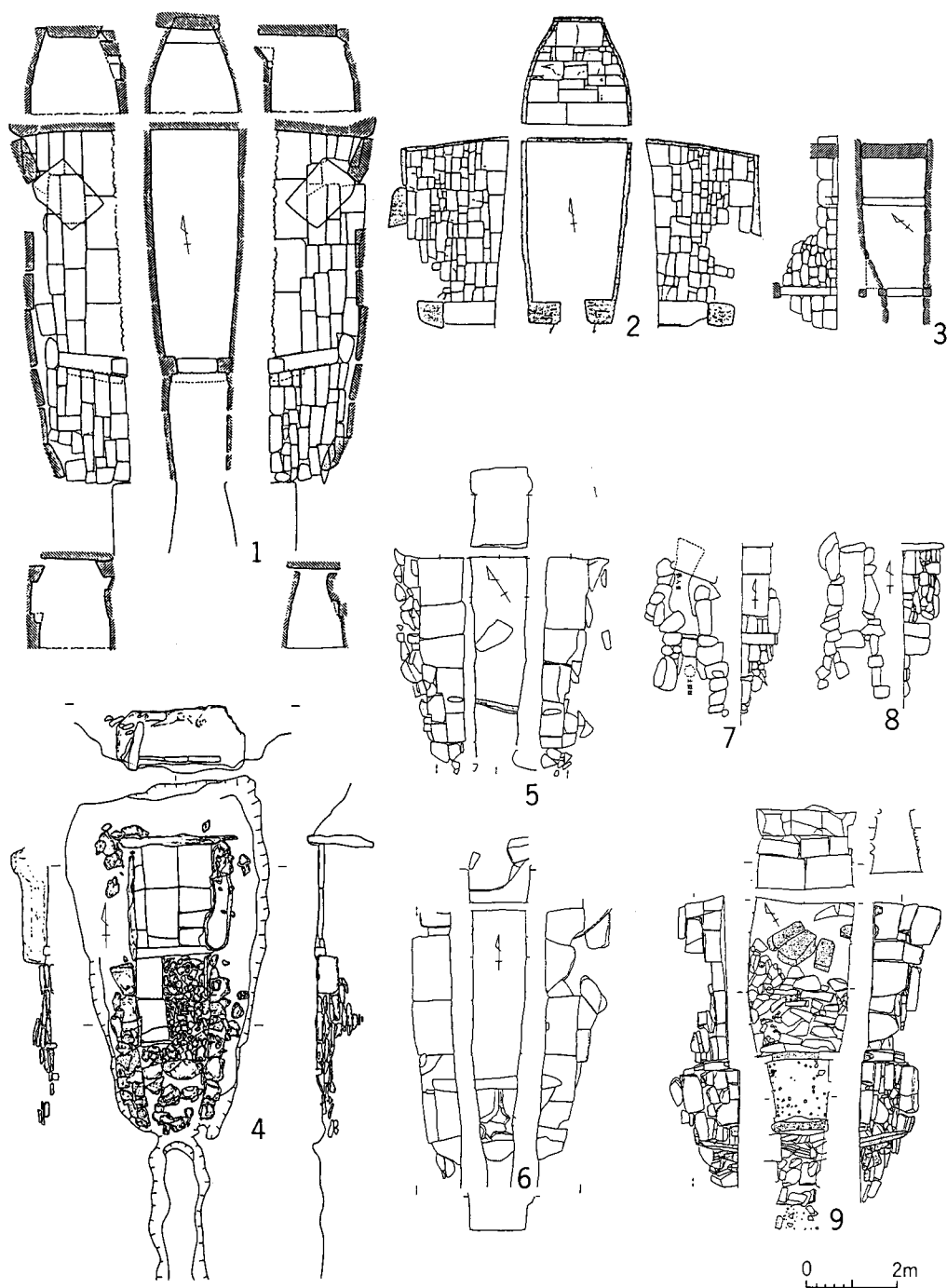


図8 横穴式石室Ⅱ・Ⅲ型

1. 赤浜2号墳 2. 前山古墳 3. 舟塚1号墳 4. 吹上2号墳 5. 幡山14号墳
6. 幡山15号墳 7. 四社神社1号墳 8. 四社神社2号墳 9. 幡山12号墳



図9 横穴式石室Ⅳ・Ⅴ型

1. 古田古墳 2. 白河内古墳 3. 虎塚古墳 4. 幡山28号墳 5. 兜塚古墳
6. 真崎10号墳 7. 風返し稲荷山古墳 8. 大師の唐櫃古墳 9. 須和間7号墳
10. 船玉古墳



図10 ①横穴式石室V型

1. 平沢4号墳 2. 平沢3号墳 3. 平沢1号墳

茨城県は壁画古墳が著名であるが、その多くは前方後円墳，方墳に設けられた横穴式石室にみられる。石室の構造別ではIV型A・B類，V型A・B類にみられるもので板石で組み上げたものに限定されている。

箱式石棺 石造による埋葬施設の初現は，すでに述べているように三昧塚古墳の箱式石棺である。箱式石棺の分布は，石材の制約があるにもかかわらずほぼ全県下にみられる。石棺に使用された

石材の中心となるものは片岩系のもので、筑波山を中心に産出する雲母片岩は、霞ヶ浦沿岸だけではなく県西地域や下総地方にまで広い範囲に分布している。県北地域では基盤層となる凝灰岩製のものが多く、いずれも組合せ式のものであるが、僅少ではあるがくり抜き形石棺もみられる。これらの石材が産出されない地域では、久慈郡大子町仲山古墳群にみられるような、珪化木、砂岩、変成岩と堆積層から採取できる石材を上手に使っている例や、那珂湊市三ツ塚古墳群のように河原石を使って竪穴式石室のように箱式石棺を形成しているものもある。

これまで確認された箱式石棺の状況を、Ⅰ、墳形別、Ⅱ、石棺の置かれている位置、Ⅲ、石棺の個数を一覧表にしてみた。なお、前方後円墳の中で、前方部が未発達のもの（帆立貝形、変形前方後円墳）もこの範疇にしている。

この箱式石棺の地名表は、県内で確認されている全てのものではないことをお断りした上で、その様相についてまとめてみる。箱式石棺はほぼ県内全域に分布しており、それらを下記の表のように分類してみると、それぞれの地域で特徴ある形態を示している。

表6 箱式石棺一覧表

古 墳 名	所 在 地	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	文 献
仲山3号墳	久慈郡大子町	前方後円墳	後円部・墳頂	4	33
幡山10号墳	常陸太田市	〃	後円部裾・基底掘込	1	
鈴の宮1号墳	勝田市	〃	くびれ部・基底掘込	1	34
塚原1号墳	東茨城郡岩間町	〃	〃 ・ 〃	1	35
舟塚山9号墳	石岡市	〃	〃 ・ 〃	1	36
大塚5号墳	新治郡千代田村	〃	〃 ・ 〃	1	
大塚8号墳	〃	〃	〃 ・ 〃	1	
大塚10号墳	〃	〃	〃, 後円部裾・〃	2	
大塚12号墳	〃	〃	くびれ部・基底掘込	1	
松延2号墳	〃	〃	〃 ・ 〃	1	
舟塚古墳	新治郡玉里村	〃	後円部中央・墳頂	1	
大井戸古墳	〃 〃	〃	?	1	
大日山古墳	〃 出島村	〃	後円部中央・墳頂	2	
石倉山5号墳	土浦市	〃	くびれ部・基底掘込	1	37
東台5号墳	〃	〃	〃 ・ 〃	1	
大日山古墳	〃	〃	〃, 前方部裾・?	2	38
三昧塚古墳	行方郡玉造町	〃	後円部中央・墳頂	1	
根小屋13号墳	〃 麻生町	〃	くびれ部・基底掘込	1	39
宮中野97-3墳	鹿島郡鹿島町	〃	後円部裾・ 〃	1	40
宮中野98-2墳	〃	〃	〃 ・ 〃	1	
大生西1号墳	行方郡潮来町	〃	造り出し部・基底上	1	41
孫舞塚古墳	〃 〃	〃	〃 ・ 〃	1	
堂目木1号墳	〃 北浦村	〃	くびれ部・ 〃	1	
高山1号墳	つくば市	方 墳	中央・基底掘込	1	42
石倉山1号墳	土浦市	〃	〃 ・ 〃	1	
石倉山2号墳	〃	〃	〃 ・ 〃	1	
石倉山8号墳	〃	〃	〃 ・ 〃	1	
石倉山9号墳	〃	〃	〃 ・ 〃	1	
舟塚山10号墳	石岡市	〃	〃 ・ 〃	1	43

古 墳 名	所 在 地	I	II	III	文 献
仲山4号墳	久慈郡太子町	円 墳	中央・〃	1	44
瑞竜1号墳	常陸太田市	〃	〃・〃	1	
瑞竜2号墳	〃	〃	〃・〃	1	
瑞竜4号墳	〃	〃	中央, 堀・〃	2	
幡山8号墳	〃	〃	中央・〃	1	45
幡山16号墳	〃	〃	〃・墳頂	2	
三ツ塚1号墳	那珂湊市	〃	?・基底上	1	
三ツ塚2号墳	〃	〃	?・〃	1	
三ツ塚3号墳	〃	〃	?・〃	1	46
三ツ塚4号墳	〃	〃	?・〃	1	
三ツ塚5号墳	〃	〃	?・〃	1	
三ツ塚6号墳	〃	〃	?・〃	1	
三ツ塚7号墳	〃	〃	中央・〃	2	47
三ツ塚8号墳	〃	〃	〃・〃	1	
三ツ塚11号墳	〃	〃	墳丘裾・〃	1	
入道古墳	〃	〃	中央・墳頂	1	
梶山古墳	鹿島郡大洋村	〃	墳丘裾・基底掘込	1	48
塔宮台古墳	〃 鉾田町	〃	中央・〃	1	
桜山古墳	〃 鹿島町	〃	中央・〃	1	
宮中野83-K墳	〃 〃	〃	墳丘裾・〃	1	
宮中野84-L墳	〃 〃	〃	〃・〃	1	49
宮中野69号墳	〃 〃	〃	〃・〃	1	
南古墳	行方郡麻生町	〃	中央・〃	1	
棒山1号墳	〃 潮来町	〃	〃・〃	1	
大生西14号墳	〃 〃	〃	〃・〃	1	50
舟塚山12号墳	〃	〃	〃・〃	1	
四ヶ村古墳	新治郡玉里村	〃	〃・〃	1	
丸山11号墳	〃 八郷町	〃	〃・墳頂	1	
丸山13号墳	〃 〃	〃	〃・基底掘込	1	51
大塚2号墳	〃 千代田村	〃	中央・基底上	1	
大塚11号墳	〃 〃	〃	〃・〃	1	
西田2号墳	〃 〃	〃	墳丘裾・基底掘込	1	
武者塚古墳	〃 新治村	〃	中央・〃	1	52
城付古墳	〃 〃	〃	〃	1	
稲荷山2号墳	〃 出島村	〃	〃	1	
稲荷山6号墳	〃 〃	〃	〃	1	
大日山古墳	〃 〃	〃	〃	1	53
笹塚3号墳	〃 〃	〃	〃	1	
甲山古墳	つくば市	〃	中央・墳頂	2	
面の井5号墳	〃	〃	墳丘裾・基底掘込	1	
関の台9号墳	〃	〃	〃・〃	1	54
寺山7号墳	真壁郡協和町	〃	中央・基底上	1	
専行寺古墳	真壁郡関城町	〃	墳丘裾・基底掘込	1	
上野古墳	〃 〃	〃	〃	1	
富士見浅間塚	結城市	〃	中央・墳頂	1	55
栗山矢尻古墳	結城郡八千代町	〃	〃・基底掘込	1	
神子埋古墳	〃 石下町	〃	〃・〃	1	
七塚5号墳	水海道市	〃	〃・〃	1	

まず、前方後円墳からみると、6世紀代の箱式石棺は、ほとんど後円部墳頂に置かれている。しかも、副葬品については、三昧塚古墳や、6世紀後半に築造された舟塚古墳にしても、粘土槨の埋葬施設をもつ中期古墳の大洗町鏡塚古墳の副葬品に匹敵するものである。三昧塚古墳と同じ時期のものとされる玉里村大井戸古墳の埋葬施設が箱式石棺であることも、田中広明氏が示した霞ヶ浦沿岸の高浜入りの地域に、当地域を掌握する首長者を置いたことが証明される。しかも、それまでの粘土槨ないしは木棺直葬の埋葬施設から、新しく組合せ式箱式石棺が導入されたことは、三昧塚古墳が木棺を副葬品埋葬施設として併用していることで、埋葬施設の切り替え時期を示すものであり、当地方における埋葬施設の変革が、他の地方でみられる横穴式石室の導入と同じような条件のもとに行われたことを示唆している。

しかも、石棺の蓋石が1枚でそれに縄掛け突起が付けられていることは、畿内における長持形石棺との関係があることを示しており、6世紀中頃の舟塚古墳にみられる二重構造の石棺とともに、副葬品の内容からも追葬の可能性は考えられず、中期古墳に示される一古墳一人埋葬の観念はなお残されていたことが考えられる。これを箱式石棺1期とする。

一方、甲山古墳は、円墳の墳頂に2基の石棺が置かれており、2号棺には3体合葬がみられ、明らかに追葬を目的とする横穴式石室の家族墓的性格をもつと考えられる。この石棺の系譜は明らかではないが、茨城県内では県北辺に位置する仲山3号墳の複数棺に求められる。この古墳群は久慈川の西岸に接した細長い台地上に形成されており、当地方は那須国に接していることもあり、古墳時代には直接に影響を受けていたことが考えられる。副葬品は二重構造の1号石棺から直刀1、刀子1、4号石棺から鎌1だけで、未盗掘にもかかわらず副葬品は極端に乏しいものである。この他、円墳の墳頂部に複数の箱式石棺を置く例として、久慈川下流域の幡山16号墳では2基の石棺をお互いに直行するように置かれており、同じ例として久慈川上流の福島県白河郡棚倉町胡麻沢古墳では2つの棺が並列して置かれている。北棺からは直刀1、鉄鏃10、骨鏃25が確認されている。骨鏃は那珂川流域にある那珂湊市磯崎古墳群からも出土している。なお、那珂川下流域では三ツ塚7号墳が2つの棺を並列させており、遺物、埋葬施設の形態などが久慈川流域に共通したものがみられることは、非常に興味深いものである。これを箱式石棺2期とする。

6世紀の後半までにみられる箱式石棺は、前方後円墳、円墳とも墳頂の中央を掘り込んで形成しており、棺材である板石は横位に使用されている。6世紀後半には、横穴式石室が多く造られ、横穴墓が久慈川河口付近に出現する時期でもある。これらはいずれも古墳内への追葬観念をもつ埋葬施設であることは地域の特徴をもちながらも、古墳時代後期の社会構造における特徴を示しているものである。

箱式石棺内への追葬については辻村純代氏がまとめているが、⁽⁶¹⁾茨城県内においては、墳頂部を掘り込んだ箱式石棺には同じ棺への追葬の痕跡はなく、棺を追加していく方式をとっている。横穴式石室が盛行して内部に箱式石棺を設置するのと、横穴墓に棺座が設けられるのとはほぼ同時に、横穴式石室内の箱式石棺を追加していく傾向がみられ、この時期はまだ同じ棺内に追葬する

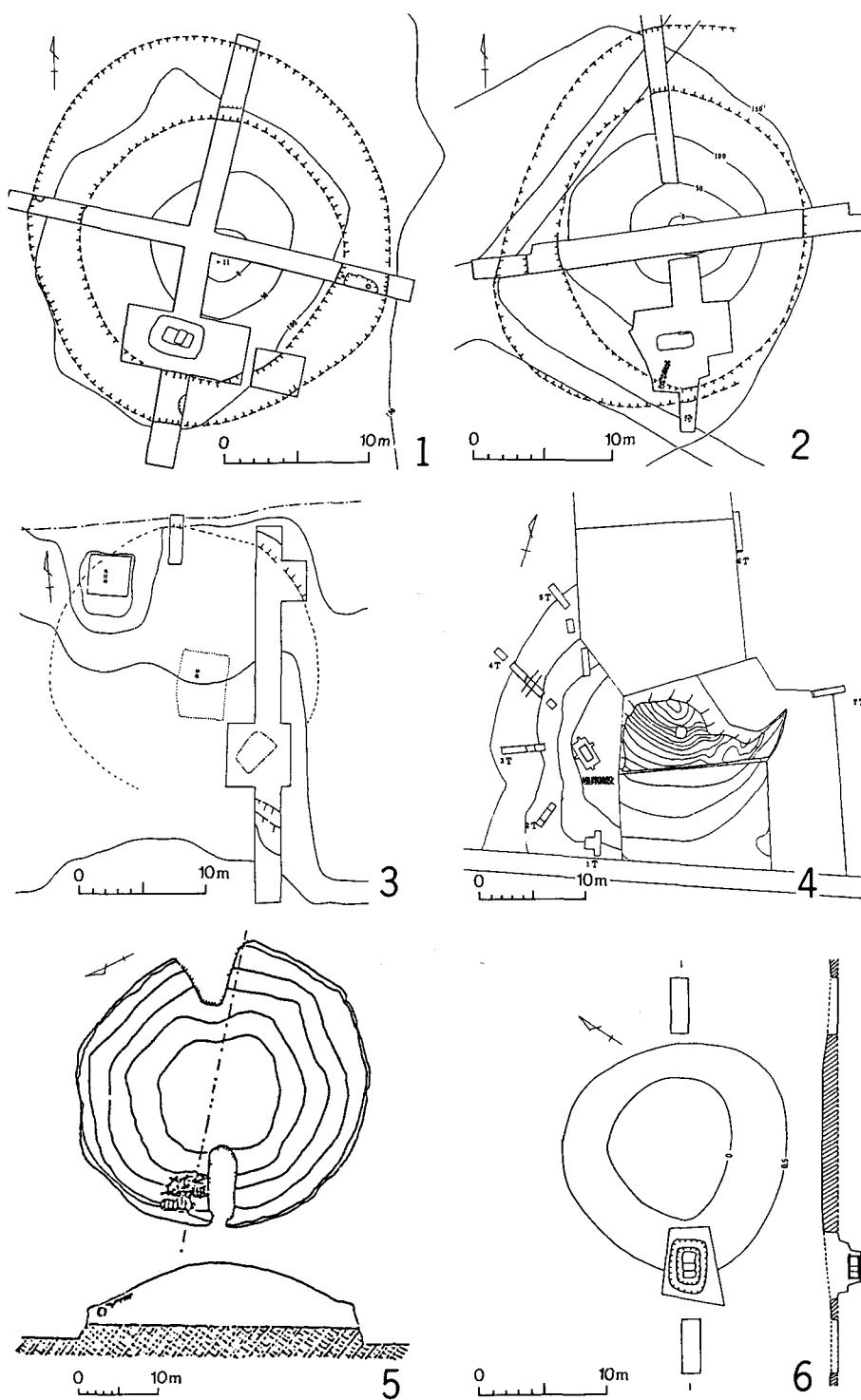


図11 墳丘裾に箱式石棺をおくもの

1. 宮中野84号墳 2. 宮中野83-K号墳 3. 専行寺古墳
4. 梶山古墳 5. 三ツ塚11号墳 6. 西田2号墳

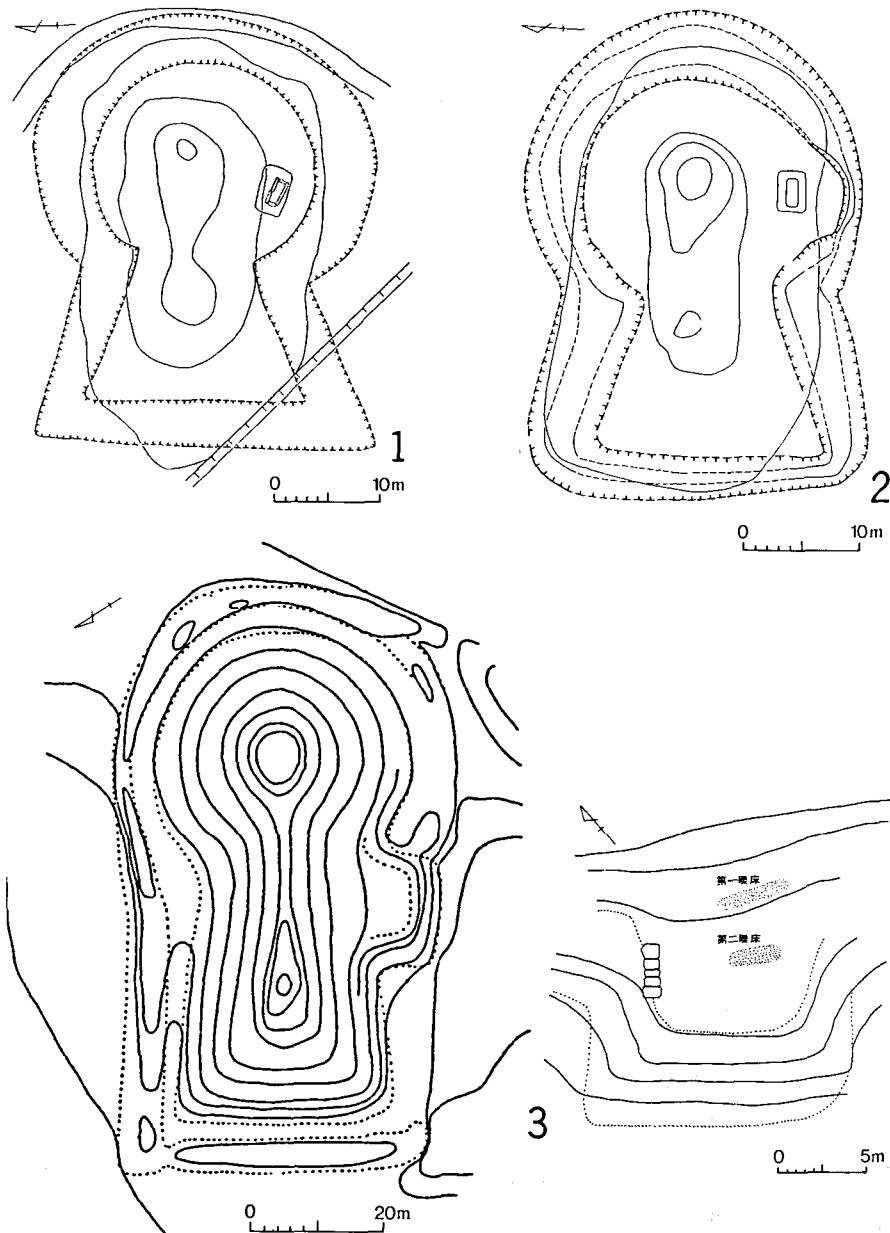


図12 造り出し部に箱式石棺のあるもの

1. 宮中野98-2号墳 2. 宮中野97-3号墳 3. 大生西1号墳

方法がとられてなかったのではないだろうか。

6世紀終末頃になると古墳群内においても地域的な特色を明確にしてくる。前方後円墳を含む古墳群や、横穴式石室を主体とする円墳を中心とした古墳群が次第に姿を消し、横穴式石室をもつ古墳では、追葬が盛んに行われるようになる。出島村稲荷山古墳では、横穴式石室内の箱式石棺の追加と共に、それらの棺への追葬が7世紀まで続き、箱式石棺まで追葬されている。虎塚古墳は、追葬というより改葬されて、壁画古墳として新たに使われるものも現れている。このよう

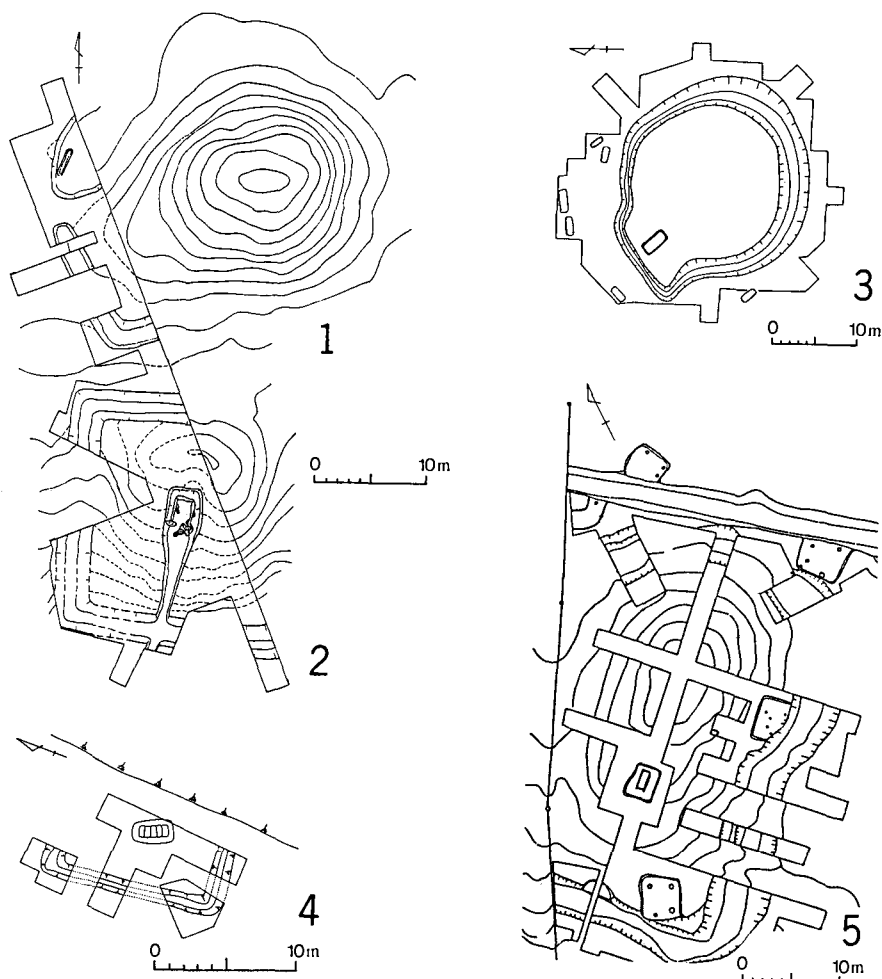


図13 前方部に箱式石棺のあるもの

1. 高山2号墳 2. 高山1号墳 3. 塚原1号墳 4. 舟塚9号墳 5. 松延2号墳

な墓制の変革は、所謂家族墓とされる概念の中で整理されるものであろうが、形式的には、これまで墳頂部に置かれた箱式石棺が、盛土する前に基底面を掘り込んで変形前方後円墳（洋梨形も含む）のくびれ部に箱式石棺を設置したり、変則的古墳と呼ばれるような墳丘裾などに箱式石棺を置いたり、前方後円墳の造り出し部に置いたりするものになり、群集墳として捉えられるものである。しかし、この傾向は県内全域ではなく、むしろ霞ヶ浦を中心とした地域に多くみられ、県北地域では群集墳の形態はなく、横穴墓が主体的に現れているのが特徴である。この時期を3期とする。

変則的古墳については市毛勲⁽⁶²⁾・茂木雅博⁽⁶³⁾・杉山晋作氏等⁽⁶⁴⁾によってすでに論じられているが、ここでは新たに加わった変形前方後円墳のくびれ部に設置された箱式石棺を加えて再検討してみる。

3期の形態として、1、円墳の墳丘裾付近に埋設したもの。2、周溝内に埋設したもの。3、前方後円墳造り出し部に埋設したもの。4、変形前方後円墳のくびれ部・前方部に埋設したもの。5、4に加え後円部裾にも埋設したもの。6、方形墳の中央に埋設したものに分類できる。また、

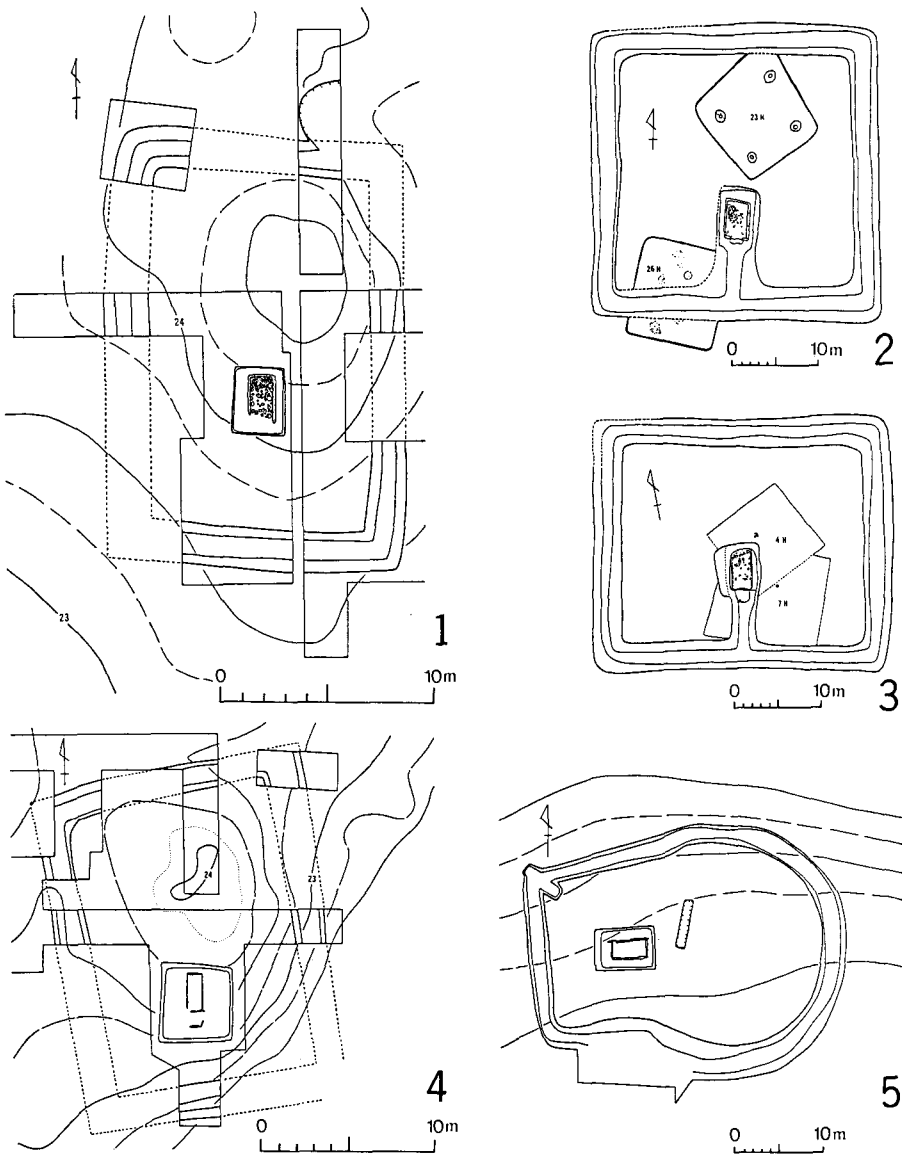


図14 石倉山古墳群の箱式石棺

1. 石倉山8号墳 2. 石倉山2号墳 3. 石倉山1号墳 4. 石倉山9号墳
5. 石倉山5号墳

板石の組み方としてa類に多くみられる横長に組んでいるもの。b類、縦長に組んでいるものに分けられる。

1は図11に示すように前方後円墳では幡山10号墳(a)、宮中野97-3号墳、98-2号墳(b)、円墳では三ツ塚11号墳(a)、梶山古墳、宮中野87-K号墳、84-L号墳、69号墳、西田2号墳、面の井5号墳、関の台9号墳(b)、専行寺古墳(a)、があげられる。

2は瑞竜4号墳(a)や、未報告であるが岩瀬町青柳古墳(円墳)(a)では4基の箱式石棺が南側の周溝堀内に1列に埋設されている。また、周溝内から土坑が認められるものがあり、直葬墓

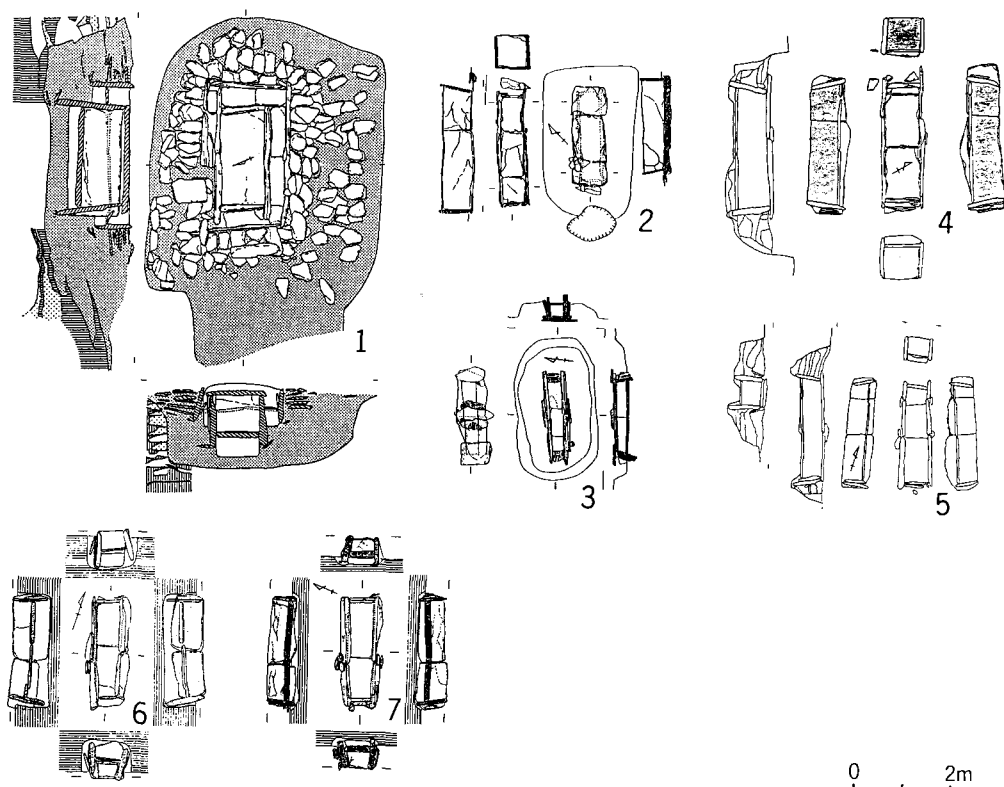


図15 箱式石棺Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期

1. 舟塚古墳 2. 専行寺古墳 3. 瑞竜 4. 大塚5号墳
6. 甲山古墳1号石棺 7. 甲山古墳2号石棺

と考えられ埋葬者の性格は別として、同一形態と考えられる。

3は図12に示すように大生西1号墳（箱式石棺のほかに礫郭が2基みられる）、孫舞塚古墳（b）の二例だけである。

4は鉾の宮1号墳（a）、塚原1号墳、舟塚山9号墳（b）、大塚5（a）、8、12号墳、松延2号墳、東台5号墳、堂目木1号墳（b）や図14に示すように石倉山5号墳があげられる。

5は大塚10号墳（b）だけであるが、大日山古墳は前方部裾（b）に置いている。

6は図13・14に示すように正方形状、長方形状の2種類がみられ、高山1号墳、石倉山2、8、9号墳（b）があげられるが、舟塚山10号墳（b）は1辺の溝が確認されているだけで、方形状とはいえないが、方形周溝墓にあるような墓域を区画するだけの目的であるならば、この時期においても方形を意識した区画の範疇にいれてよいのではないだろうか。

変則的古墳とされるものを6形態に分類したが、円墳の中央の基底面上に箱式石棺を置いたものと、基底面を掘り込んで埋設したものがこの他にある。前者には大塚2・11号墳、未確認である三ツ塚1～8号墳、寺山8号墳があげられ、いずれもa類である。後者は仲山4号墳、瑞竜1・2号墳、幡山8号墳、栗山矢尻古墳、神子埋古墳、七塚5号墳（a）、塔宮台古墳、桜山古墳、南

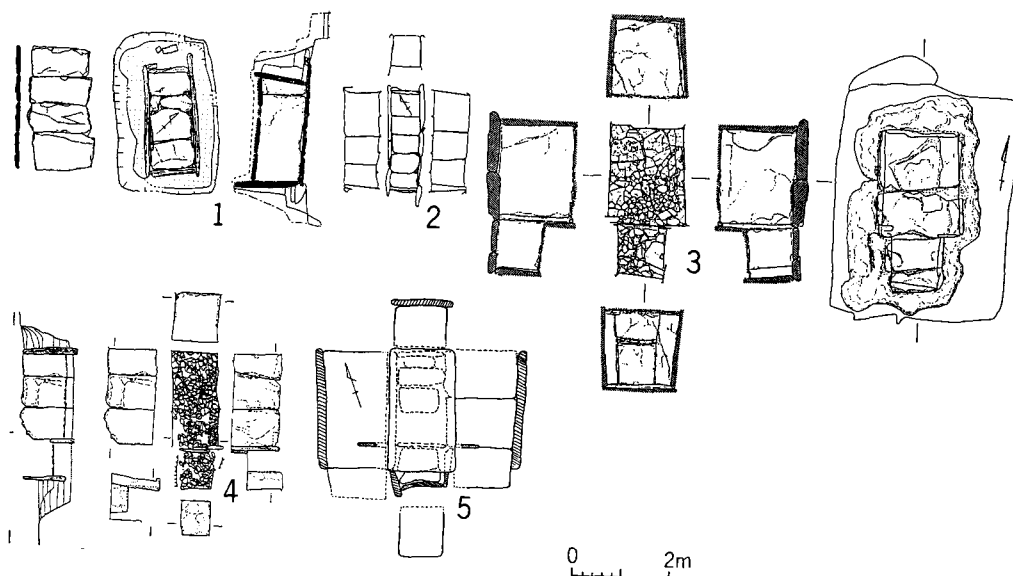


図16 箱式石棺Ⅲ期b類

1. 梶山古墳 2. 大生西古墳 3. 武者塚古墳 4. 石倉山9号墳 5. 姥久保古墳

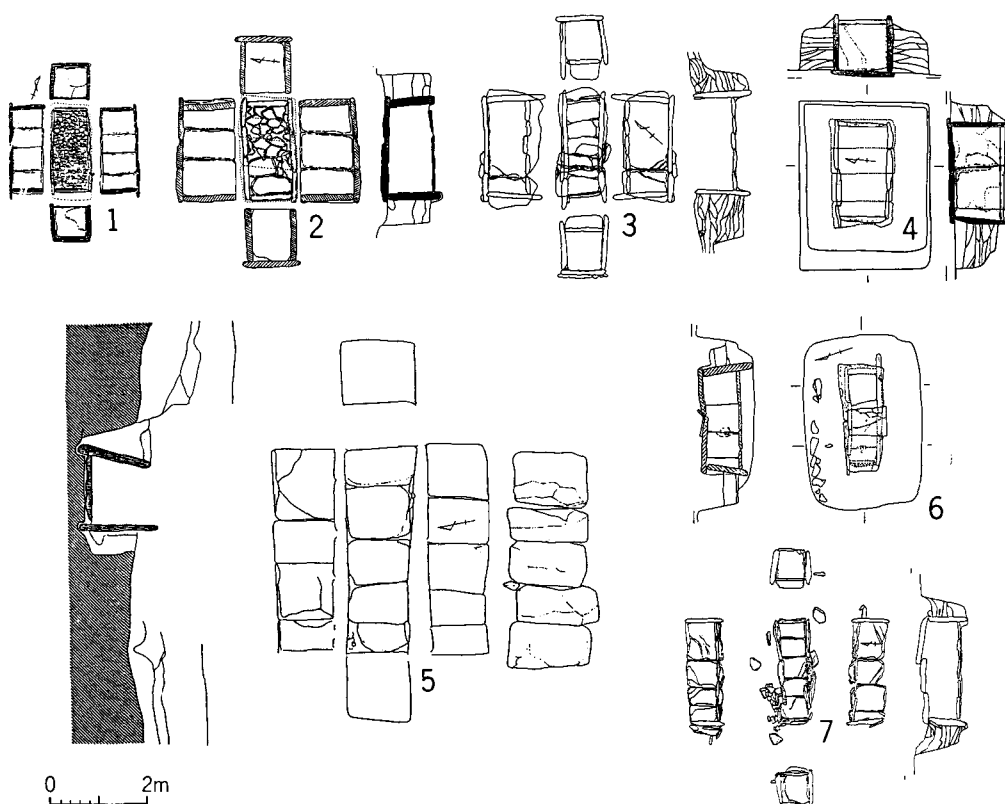


図17 箱式石棺Ⅲ期b類・横口式箱式石棺

1. 舟塚山9号墳 2. 舟塚山12号墳 3. 松延2号墳 4. 石倉山5号墳
6. 宮中野84-L墳 7. 大塚12号墳

古墳、棒山1号墳、大生西14号墳、舟塚山12号墳、四ヶ村古墳、武者塚古墳(b)であり、a類とb類に分けられる。

4. 横穴墓とその終末

常陸地方には現在78横穴墓群、1,442基以上の横穴墓が確認・登録されている⁽⁶⁵⁾。これらの横穴墓の分布をみると、茨城県北部の久慈川・那珂川流域及び海岸線沿いに横穴墓の分布が認められる。中でも久慈川流域がその中心であり、常陸太田市には19横穴墓群、898基以上の横穴墓が確認されている。これは常陸地方の横穴墓群の24%、確認基数の62%にあたる。更に久慈川流域の日立市南部域及び金砂郷村に所在する横穴墓まで含めると、34横穴墓群、1,046基以上となる。これは常陸地方の44%、73%となり、横穴墓群の1/2弱、確認基数の約3/4が久慈川流域に集中することになる。これに対して県南部では出島村・美浦村・鹿島町に5横穴墓群、35基を数えるにすぎず、常陸地方の7%弱、4%弱をしめるにすぎない。

横穴墓の分布は偏在する傾向を示し、その要因は地質学的環境＝横穴墓構築の容易さに左右されるものでないことは、既に金井塚良一氏等によって指摘されていることであるが、常陸地方の横穴墓の分布も、金井塚氏の指摘と同様の傾向を示すものとなっている。横穴墓が極端に集中する茨城県北部地方は、阿武隈山地の南端に位置するため、丘陵が発達し、その丘陵を多くの河川が浸食し、舌状台地状の崖面を多く形成している。また基盤は第三紀層の凝灰岩質泥岩層で、河川により浸食を受けた崖面には、掘削の容易な凝灰岩質泥岩層の基盤が露頭している。このような地質学的環境は横穴墓集中の1つの要因になっている。しかし同様の地質学的環境の中でも、横穴墓が集中するのは常陸太田市を中心とする久慈川流域のみであることは、横穴墓集中の要因が地質学的環境のみでないことを示している。

常陸太田市域の横穴墓群の特徴の1つとして、一群の構成基数の多さがあげられる。常陸地方の横穴墓群の構成をみると、数段で一群を構成する例が多いが、幡山横穴墓群では崖面全体に横穴墓が構築される例が認められる。このように一地点に横穴墓が集中することを考えれば、甘粕健・久保哲三両氏の指摘のように、横穴墓の構築は「在地の集団の自発的な選択によって成立したというよりも、何らかの強力な外的要因によることが大きい」ことを示すものと思われる。

久慈川流域の横穴墓群は調査例が他の地域に較べて多く、横穴墓群全体の実態が明らかな例が比較的多い。日立市千福寺下横穴墓群⁽⁶⁸⁾、赤羽横穴墓群⁽⁶⁹⁾、常陸太田市身隠山横穴墓群⁽⁷⁰⁾、幡町バツケ横穴墓群⁽⁷¹⁾（幡横穴墓群）、幡山横穴墓群⁽⁷²⁾、金砂郷村猫淵横穴墓群等⁽⁷³⁾があげられる。また久慈川流域以外では、勝田市十五郎穴横穴墓群⁽⁷⁴⁾があげられる。以下久慈川流域の主要な横穴墓を概観し、常陸地方の横穴墓の特徴を抽出してみたい。

赤羽横穴墓群は久慈川下流左岸の掌手状に谷津が入り込んだ台地斜面に立地し、西からA～Dの4支丘が確認されている。各支丘の確認基数は、A支丘6基以上、B支丘1基、C支丘22基以

上、D支丘31基以上で、総数60基以上からなる横穴墓群である。この4つの支丘のうちB、D支丘の32基が、日立市教育委員会によって調査が行われている。

B支丘1号墓は、赤羽横穴墓群のほぼ中央に位置するB支丘の先端を占地している。B支丘を踏査した結果、1号墓の他に横穴墓が確認できないことから、一横穴墓が一支丘を独占しているものと思われ、横穴墓立地の条件では特異的な横穴墓である。規模は県内最大規模を有し遺存長7.84メートル、玄室長5.47メートル、奥壁幅3.86メートル、奥壁高3.00メートル、前壁幅2.29メートルを測る。玄室の平面形態は逆台形、奥壁形態は側縁湾曲台形を呈する。施設として、間仕切のある棺座を有し、間仕切の両側端は角柱状の造り出しを設けている。出土遺物は、後世の攪乱が著しく、遺存状況は良好なものとはいえないが、金銅製冠金具、玉類（ガラス製丸玉・ガラス製小玉・水晶製切子玉・琥珀製棗玉）、貝輪、大刀、刀子、刀装具、弓飾金具（両頭金具）、鉄鏃、鉾、挂甲（小札）、馬具（金銅製鏡板付轡・金銅製杏葉・金銅製雲珠・金銅製飾金具・鞆・鉸）、須恵器を確認している。遺物から得られるB支丘1号墓の築造年代は、6世紀後半代であり、常陸地方最古の横穴墓といえよう。

これに対して、D支丘の横穴墓は、概して規格性の弱い横穴墓が多い。また比較的整った形態の横穴墓でも整形が荒い等、後出的要素が強いと判断される。遺物は通有の横穴墓で認められる大刀、刀子、管玉等で、B支丘1号墓に比べ貧弱なものであり、D支丘の横穴墓は、B支丘とは同質に語れないものである。

横穴墓の立地・規模・構造・遺物から判断して、B支丘1号墓は赤羽横穴墓群の盟主的存在の横穴墓であり、またその築造年代を考慮にいった時、赤羽横穴墓群の群構成の端緒は、B支丘1号墓に求められよう。遺物からは、同時期の高塚古墳の被葬者より高い身分の人間を想定することが可能であり、少なくとも久慈川河口周辺を支配していた豪族であることに間違いはない。そして6世紀後半代という築造年代は、高塚古墳の主体部が、同じ地域で横穴式石室へと移行する画期であり、その時期に既に横穴墓を築造し得たことは、中央とのつながりを示すものといえよう。またこのことは、横穴墓が、横穴式石室の模倣であるとする見解に異を唱えるものともなる。更に冠金具や金銅製の馬具が副葬されながらも、高塚古墳でなく新しい墓制の横穴墓に埋葬されていたB支丘1号墓の被葬者は、久慈川河口を治めていた在地の豪族よりも中央から派遣された官人の可能性が強いものである。

B支丘1号墓が内包する特異性を考える時、いわき市中田⁽⁷⁵⁾横穴、静岡市宇洞ヶ谷⁽⁷⁶⁾横穴と同質の横穴墓であると考えられ、通有の横穴墓とその性格は異なるものと理解される。

千福寺下横穴墓群は、赤羽横穴墓群の東方約600メートルに位置する。総数41基を数える横穴墓群で、東群、西群の2群に分けられるようである。41基の横穴墓群のうち3・5・12・26・32・34・37号墓は構造や遺物の点で他の横穴墓より優れた横穴墓であると理解できる。これらの横穴墓の構造をみると、玄室の平面形態が台形または長方形、奥壁形態は台形、アーチ形、又はドーム形をする等、強い規格性を認められないものの、注目すべきは、全ての横穴墓に棺座を設

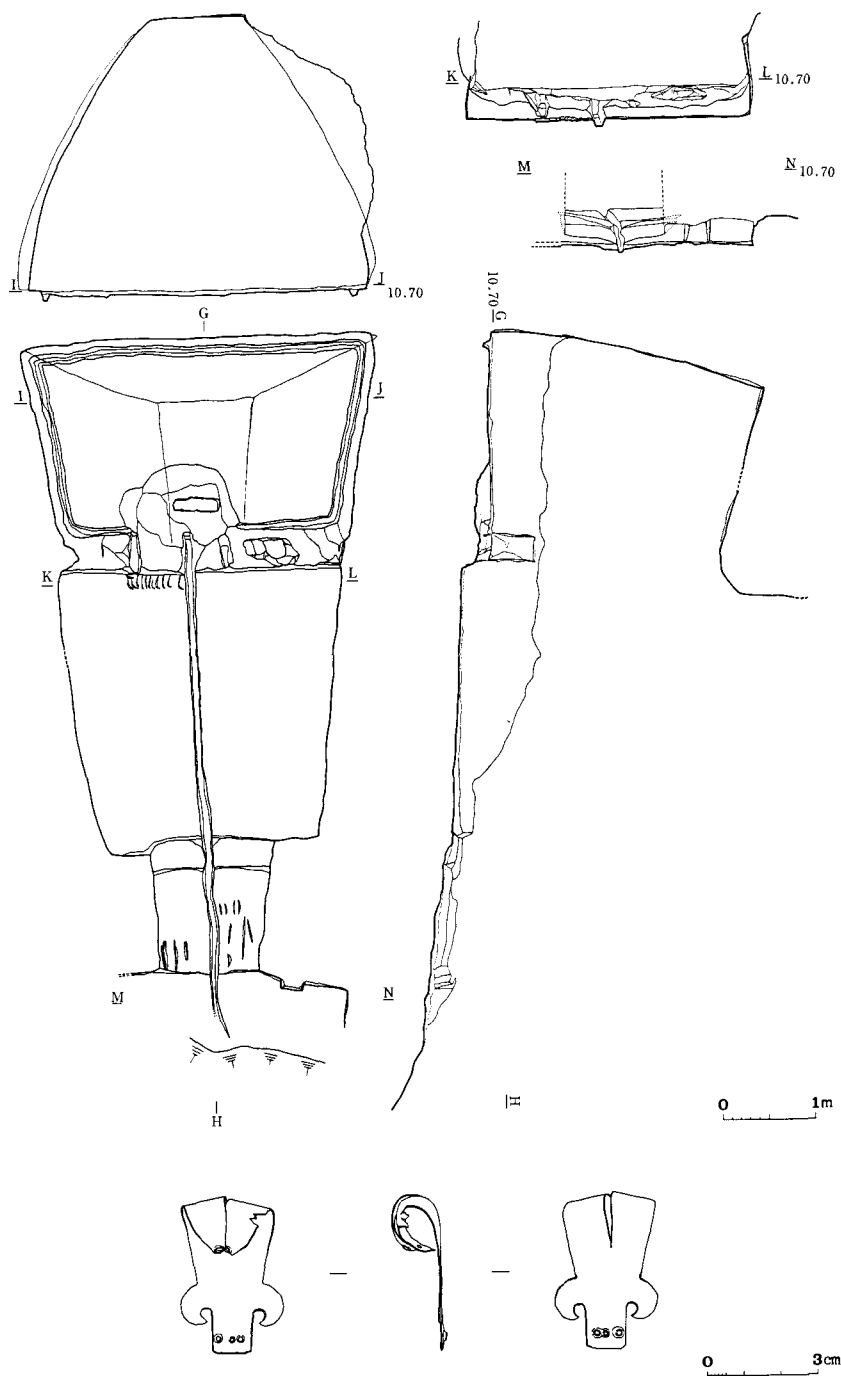


図18 赤羽横穴墓群B支丘1号墓実測図及び出土冠金具実測図

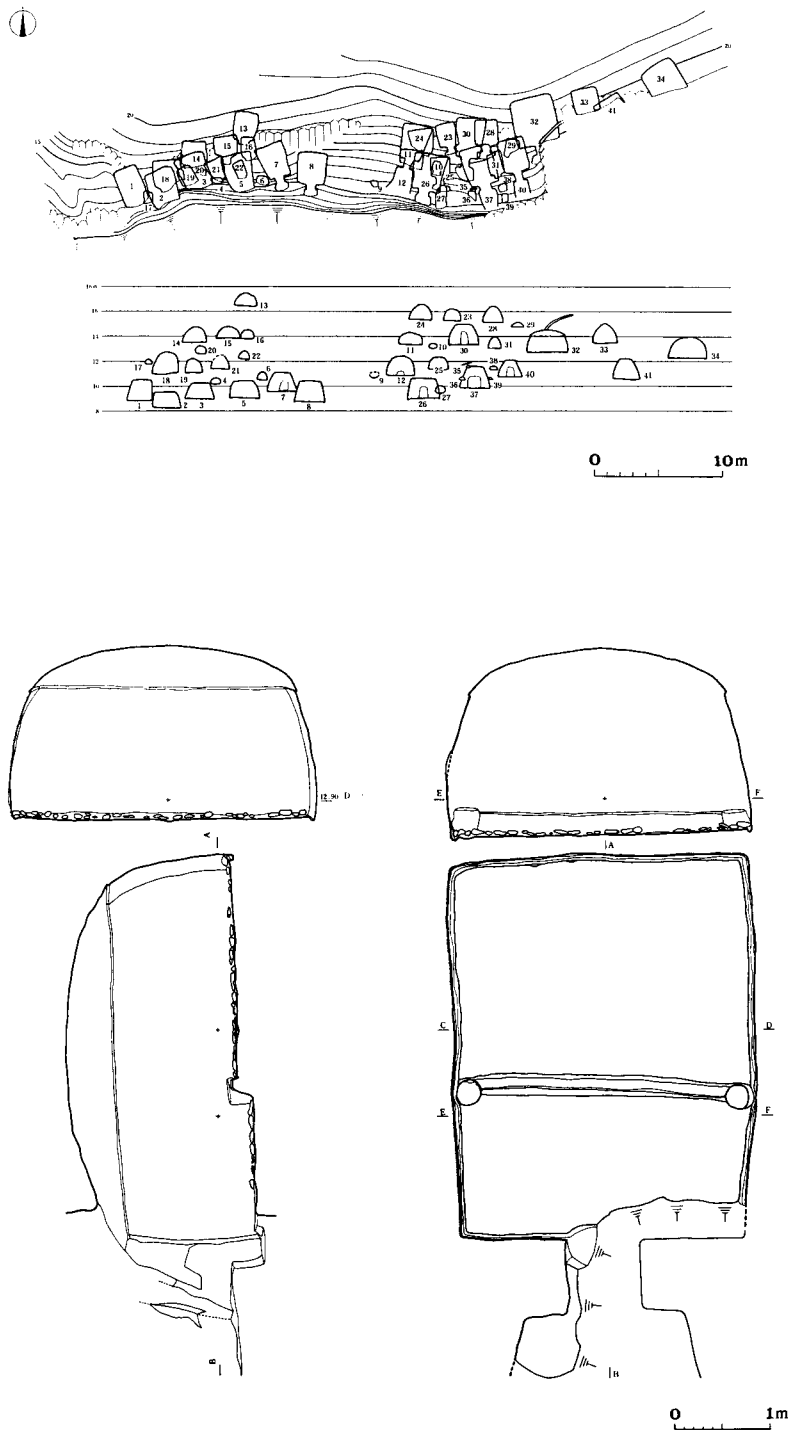


図19 千福寺下横穴墓群横穴墓分布図及び32号墓実測図
(註4 鈴木ほか1986より)

けてある。このうち12・26・32号墓では、棺座間仕切りに柱状の造り出しを設けるものであり、福島県南部に比較的多く発見される副室構造の横穴墓の簡略した形態として捉えることが可能であろう。32号墓は奥壁が台形を呈し、天井部は偏平なドーム状を呈するものであるが、天井と各壁の境には軒回りを表現した幅2センチメートル程の稜を造り出しており家形横穴墓の構造をとるものである。32号墓は東群の中でも盟主的存在を示すかのようにアーチ形の横穴墓を従えるような位置に存在しており、その規模・形態とともに注目されるものである。なお千福寺下横穴墓群では、奥壁形態が、アーチ形から台形への変遷が確認されている。

幡山横穴墓群は3群から成る横穴墓群で、総数56基を確認している。それぞれの支群は群形成の端緒を切妻入り家形横穴墓に求められる点⁽⁷⁷⁾が注目される。これらの横穴墓は、千福寺下横穴墓群と同様に有縁棺座を設けるものである。そしてB群7・9・12号墓のように、他の横穴墓を凌駕する規模や立地の横穴墓が存在する点や、副室構造の横穴墓の系譜を引く横穴墓の存在は、千福寺下横穴墓群との強い関連性を見いだすことが可能であり、ひいては東北地方南部の横穴墓との関連をも窺わせるものである。このように幡山横穴墓群と千福寺下横穴墓群は、多くの共通点を見いだすことが可能であり、更に幡山横穴墓群B群9・12号墓と千福寺下横穴墓群32号墓との共通性は、両横穴墓群が同一系統の工人集団によって築造されたことを示すものと考えられる。

以上みてきたように久慈川流域の横穴墓群の中で立地・構造や副葬品の点で他の横穴墓より優位にたつ横穴墓、つまり群構成の端緒となる可能性をもつ横穴墓は、平面形態が逆台形又は長方形、奥壁形態が台形、アーチ形、ドーム形を呈し、間仕切の両側端に柱状の造り出しをもつ有縁棺座を設ける例が多い。この内、千福寺下横穴墓群で確認されている奥壁形態のアーチ形から台形への変遷について、久慈川流域の横穴墓群に当てはめることは現時点では困難なことである。しかし、千福寺下横穴墓群や幡山横穴墓群に認められる例を考慮すれば、一墓群の中でも優位にたつ横穴墓の中で更に先行し、優位にたつ形態として家形横穴墓を想定することは可能であろう。

このように久慈川流域の横穴墓をみてきたときに問題となるのが、赤羽横穴墓B支丘1号墓の位置である。赤羽横穴墓B支丘1号墓の玄室は両側端造り出しの有縁棺座を設け、副室構造の横穴墓の系統を示すものであるが、奥壁形態は台形を示している。このように横穴墓の形態からみれば初現的横穴墓の形態の中では比較的新しい時期に位置付けられるものであるが、遺物から得られる年代は常陸地方の横穴墓の最古に位置付けることができる。この2つの観点からのギャップは、赤羽横穴墓群B支丘1号墓の被葬者が、中央から派遣されてきた官人である可能性に、解決の糸口を見いだすことが可能となろう。

常陸地方の横穴墓の特徴の1つとして、装飾横穴墓の存在があげられる。現在確認されている装飾横穴墓は、水戸市権現山横穴墓群1・2号墓⁽⁷⁸⁾、日立市かんぶり穴横穴墓群2・11・14号墓⁽⁷⁹⁾、常陸太田市幡横穴墓群6・11号⁽⁸⁰⁾、金砂郷村猫淵横穴墓群9号墓の8基である。これらの横穴墓の形態をみると、玄室の平面形態は逆台形、奥壁形態は台形を呈する例が多い(権現山下横穴墓のみは、平面形態は長方形、奥壁形態はドーム形となる)。これは、いままでみてきた、一群

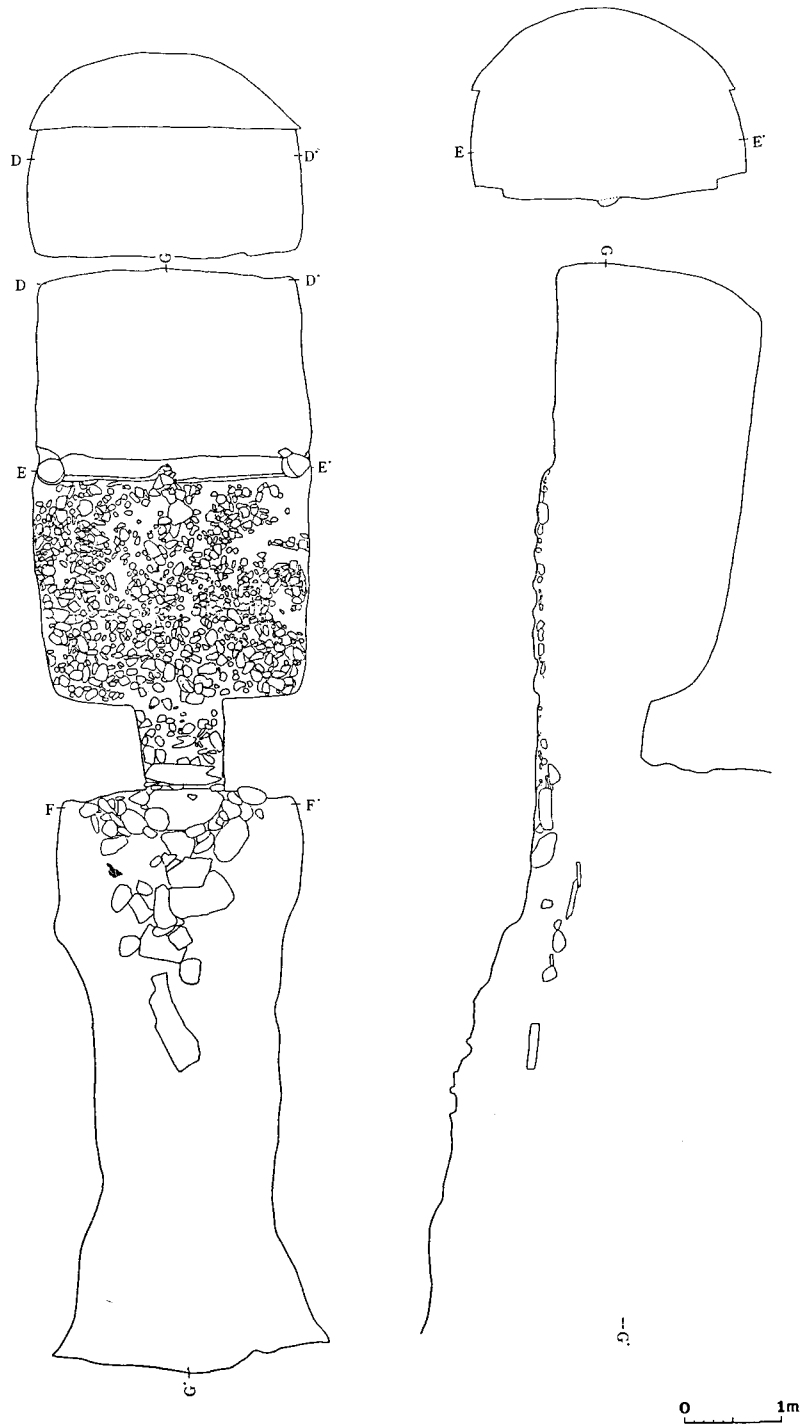


図20 幡山横穴墓群B支群12号墓実測図
(註8より)

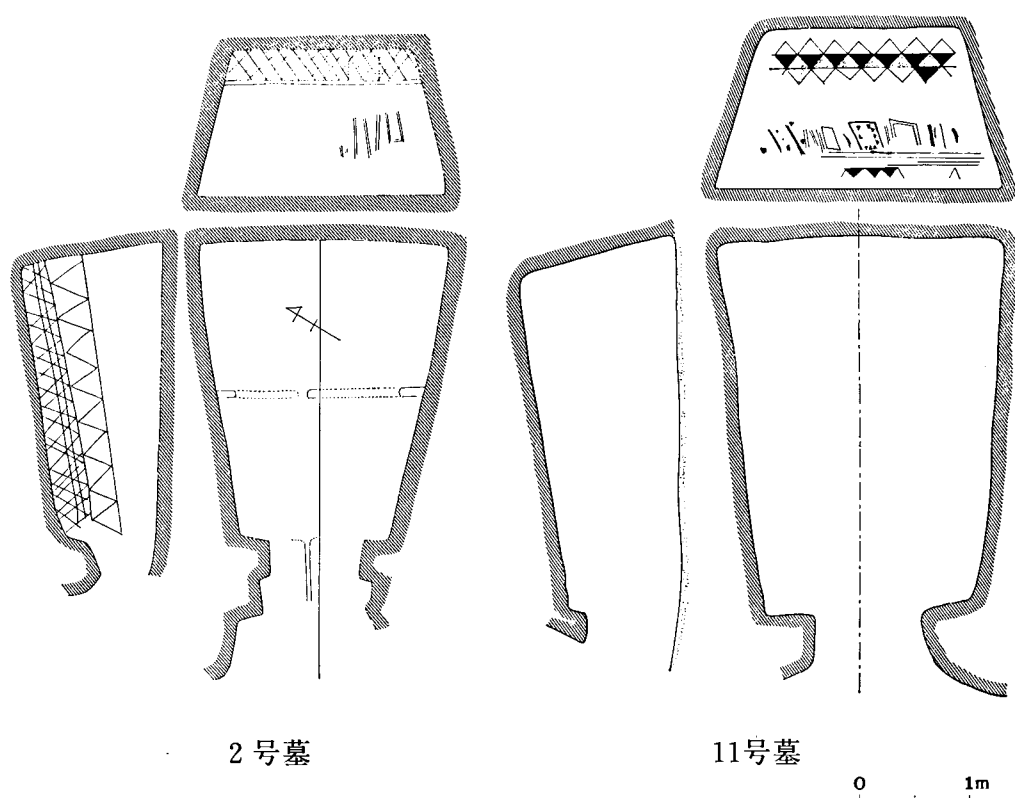


図21 かんぶり穴横穴墓群2・11号墓実測図
(註15 齊藤 1974より)

の中で優位にたつ横穴墓の形態と類することになる。つまり装飾横穴墓の被葬者が、氏族集団内で特別な性格・地位にいた人間であることを示すものである⁽⁸¹⁾。

また装飾の内容であるが、かんぶり穴横穴墓群の例では、線刻した連続三角文の上に、赤・白・黒で塗彩し、他に盾及び刀らしい図柄が塗彩されている。これに対して、他の5例は、線刻によるラフスケッチ的手法をとるものであり、後代の落書きの可能性も残されるものである。かんぶり穴横穴墓群の装飾の内容は、勝田市虎塚古墳の装飾に非常に類似すると共に、いわき市中田横穴墓との関連も考慮しなくてはなるまい。かんぶり穴横穴墓群の装飾横穴墓の築造年代を、虎塚古墳との類似性から7世紀前半頃に求めることができるとするならば、6世紀の後半代の築造と考えられる中田横穴墓より後出することになる。これは福島県南部の複室構造の横穴墓の簡略形態として捉えられる横穴墓が、常陸地方にも認められる点と対応するものであり、常陸地方の横穴墓の系譜を考える上で重要な示唆を与えてくれるものである。

赤羽横穴墓群B支丘1号墓に象徴される、一群の中でも他の横穴墓を凌駕する内容を示す横穴墓の存在や、横穴墓内に装飾を施す点で他の横穴墓から優位を示す横穴墓の存在は、一群の横穴墓の被葬者の全てが氏族集団の中で同等の地位を占めていた人間であったことを否定するもので

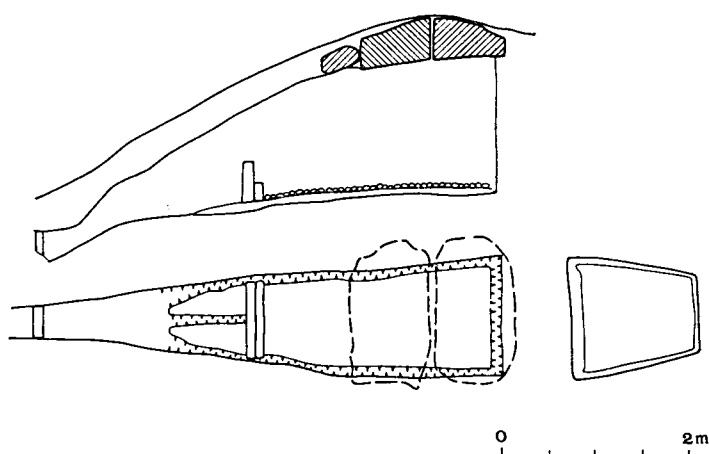


図22 山吹山古墳石室実測図
(註20 大森1974より)

ある。そして他より優位にたつ横穴墓が、一群の中で初現的な横穴墓であることは、氏族集団の中で特別な地位を占めていた人間からその他の人間へと、被葬者の社会的な地位が、徐々に拡大されていったことを示すものと考えられる。

常陸地方の古墳をみると、横穴墓との強い関連を示す古墳が存在することがわかる。常陸太田市山吹山古墳⁽⁸³⁾がそれである。山吹山古墳は、凝灰岩の基盤を掘削して主体部を設け、同質の岩を天井として載せ、更に封土を被覆して円墳を構築したものであり、主体部は横穴式石室ではなく、横穴墓の一変種として捉えられるものである。現在、常陸地方では、同様の主体部をもつ古墳の例は確認されておらず、山吹山古墳が、特異な例であることを示している。また高塚古墳の主体部に、変種といえども横穴墓が用いられている点で、高塚古墳と横穴墓の関係を考える上で、重要な問題を提起していると思われる。

常陸地方の横穴墓の終末については、不明な点が多い。しかし十五郎穴横穴墓群32号墓の羨門部や前庭部から、須恵器の蔵骨器が出土したことや、北茨城市尾形山横穴墓群から銅椀蓋が出土したこと⁽⁸⁴⁾、幡横穴墓群の壁画にみられる龍と思われる図柄や、三重塔などから、常陸地方に仏教が普及したと思われる8世紀後半代までは、墳墓として機能していたと思われ、一部では9世紀に入る頃までは追葬が行われていたものと考えられる。

ま と め

茨城県における後期古墳について概観してきたが、今回は墳丘については中・後期の方後円墳のみにしたが、それぞれの副葬品などには触れず、埋葬施設を中心に検討してみた。検討材料についても、全ての資料を掌握したうえでのものではなく、詳細な検討ができなかった部分があることをお断りしなければならない。

茨城県における埋葬施設は、地域的遍在の中で成立したもので、特に終末期においては、群集墳とされる変則的古墳が、霞ヶ浦沿岸地域と、利根川流域の千葉県北部地域に同じ形態でみられることは、これまでの先覚者の知るところである。

埋葬施設のそれぞれの分布状態をみると、箱式石棺1期(6世紀初頭～中頃)は霞ヶ浦、鬼怒川流域(富士見浅間塚)などに拠点的性格をもって点在するが、これと並行する時期に、日立市西大塚1、3号墳、麻生町南古墳(前方部と後円部の両方に竪穴式石室をもつ)などの竪穴式石室があり、西大塚1号墳の副葬品の剣菱形杏葉、轡、鏡板、辻金具などの馬具などから6世紀中葉頃に位置付けられ、三昧塚古墳や舟塚古墳に近接した時期が考えられている。

箱式石棺2期(6世紀中頃～後半)になると筑波山系から多賀山系までの広がりがある。この分布は山沿であるが、いずれも河川流域に位置している。この1期と2期の間か、2期と並行する頃に横穴式石室が現れる。横穴式石室が、最初に前方後円墳に採用されたことは、丸山4号墳(I型B類)や、帆立貝形古墳の玉造町大日塚古墳(IV型A類)などから考えられる。しかも、箱式石棺1期の分布に近接して現れていることが、この地域の特殊性を示している。その後、横穴式石室は、前方後円墳にはあまり採用されず、おもに円墳に多く構築されている。その分布は、霞ヶ浦沿岸ではあまりみられず、むしろ箱式石棺2期の分布に重なるようにみられるのが特徴である。また、この頃、日立市赤羽横穴墓B支丘1号墓が造営されていたことが考えられ、追葬觀念が急速に高まってきたことを示している。

箱式石棺3期(6世紀終末～7世紀)になると下総から常陸(霞ヶ浦を中心として)にかけて、従来の墳形・埋葬施設の概念が崩れ、所謂、変則的古墳が築造されるようになり、箱の組み方、埋葬施設の位置に多くの変化がみられるようになる。特徴的なのは、埋設位置と板石の使い方である。埋設位置は墳丘の形状に左右され、中心に置いたり、裾近くに置いたり、くびれ部に置いたり、前方部や造り出し部に置いたりしているが、共通することはいずれも基底面を掘り込み土壙を形成した中に板石を組み込んでいる。また、板石は縦(b類)に使用しており棺内を深くしている。このことは、追葬を容易にするための方法であり、梶山古墳のように、確認できた骨片から5体が屈葬されていた可能性があり、副葬品は大刀10(圭頭大刀、獅噬環式環頭大刀、円頭大刀、8窓倒卵形鐔)、刀子1、耳環3、玉類(管玉10、勾玉24、切子玉27、棗玉3、丸玉9、算盤玉1、白玉5、小玉645)複数組のものが出土している。この古墳の副葬品は、県内においても特殊であり、多くの箱式石棺は副葬品が少なく直刀や刀子などに限られている。

箱式石棺2期では追葬のために同一墳丘内に棺を加える方法がとられている。この場合、板石を横組にしているため棺内は浅く、とうてい棺内追葬は無理な構造をしているが、それに追葬をしている例もある。この時期の後半の横穴式石室は石室内部に箱式石棺を組み込み、棺を追加していく方法がとられているが、その後は棺は足さずに追葬しているのがみられ、理念的には同じものを持っている。

この時期の横穴式石室は装飾壁画があるIV型のような板石を組んだものが多いが、装飾壁画が

みられなくなるころには、同じ板石でもV型後半のような箱形になり箱式石棺の追加が行われるようになる。これらの変化は箱式石棺が影響したもので、箱式石棺においても、横穴式石室と折衷したような武者塚古墳タイプのものが造られるようになる。しかも武者塚古墳には6体分の人骨が残り、副葬品には前室・玄室に大刀5（圭頭大刀、三累環頭大刀）、青銅製鈎、銀製带状金具、鉄鏃44、玉類（勾玉16、切子玉1、ガラス小玉88）などこの形式の埋葬施設には例のないものがみられる。このような特殊な副葬品をもつ終末期古墳は、埋葬施設が異なるものでも地域の豪族層の消息が窺えるものであり、この時期に箱式石棺が盛行しない県北地域では、横穴墓が盛んに追られており、その導入者と考えられる赤羽横穴墓群B支丘1号墓の副葬品にみられるような冠や馬具などの特殊なものをもつ豪族がその後、この地域に横穴墓群を形成させた基盤となり、地域における勢力圏の安定化があったことを示すものである。これらの地方豪族達が、常陸国や11郡の成立に大きく関わりをもったことは後の資料に示されている。

茨城県における寺院建立の初現は、これまでの研究では各郡とも8世紀初頭と考えている。郡の寺の成立前に、豪族による氏寺造営の可能性は、北茨城市馬頭観音廃寺、金砂郷村久米廃寺、水戸市台渡里廃寺、石岡市茨城廃寺、協和町新治廃寺、結城市結城廃寺、つくば市中台廃寺などであり、これらの地域の終末期古墳は明確でない。しかし、中台廃寺の周辺では横穴式石室のV型が分布しており、その代表的な位置を占めるものに佐渡ヶ岩屋古墳（平沢1号墳）がある。この古墳は中台廃寺、平沢官衙跡を見おろす位置に築造されている。茨城廃寺周辺では、南を流れる恋瀬川の対岸に大塚古墳群、松延古墳群、栗村東・西古墳群（未報告）など変則的古墳を中心とした終末期群集墳が存在している。この群集墳には6世紀後半から7世紀終末頃までの横穴式石室、箱式石棺、竪穴式石室など終末期古墳が集大成されており、国衙および郡衙が現在の石岡市に置かれた背景がこの地域に起因していることを十分に認識できるものである。他の地域においては律令期に移行する過程が十分に掌握されていないが、いずれ調査が進むにつれて解明できるものと思われる。

註

- (1) 後藤守一ほか『三昧塚』1960
- (2) 堅田直「前方後円墳の墳丘について―築造の原則―」『考古学論考―小林行雄博士古稀記念論文集―』平凡社 1982
- (3) 諸星政得ほか『赤羽古墳群』常総台地研究会 1972
- (4) 佐藤政則「久慈川下流左岸の古墳形成」『紀要』3 日立市郷土博物館 1983
- (5) 伊東重敏ほか『幡山遺跡発掘調査報告書』常陸太田市教育委員会 1977
高根信和「常陸における古墳群について―特に久慈川流域における古墳を中心として―」『茨城県立歴史館報』16 茨城県立歴史館 1989
- (6) 大塚初重ほか『虎塚壁面古墳 第1次発掘調査極要』勝田市史編さん委員会 1973
- (7) 井上義『那珂湊市磯崎古墳群入道古墳調査報告書』那珂湊市教育委員会・放射線医学総合研究所・入道古墳発掘調査団 1974・8
- (8) 茨城県教育財団文化財調査報告Ⅴ『常磐自動車関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』茨城県教育財団 1980・3
- (9) 8と同じ

- 黒沢彰哉 『茨城県千代田村松延3・4号墳発掘調査報告』千代田村教育委員会 1983・3
- (10) 後藤守一・大塚初重 『茨城県新治郡丸山4号墳』『日本考古学年報』7 日本考古学協会 1958
- (11) 早稲田大学考古学研究室 「福田古墳群第9号墳・長堀古墳群第2号墳・柏崎古墳群富士見塚古墳の測量」『茨城考古学』第5号 1973
- 田中広明 「霞ヶ浦の首長—茨城県出島半島をめぐる古墳時代の研究」『婆良岐考古』第10号 1988・4
- (12) 大塚初重・小林三郎 「茨城県新治郡玉里村舟塚古墳第1次発掘調査の報告」『日本考古学協会総会発表要旨』1966
- 大塚初重・小林三郎 「茨城県舟塚古墳Ⅰ」『考古学集刊』4—1 1968
- 大塚初重・川上博義・小林三郎 『玉里村舟塚古墳』茨城県教育委員会 1971
- (13) 大森信英 「茨城県行方郡麻生町南古墳」『日本考古学年報』11 日本考古学協会 1962
- (14) 大場磐雄他 『常陸大生古墳群』行方郡潮来町教育委員会 1971・5
- (15) 大塚初重 「三味塚古墳の調査を終って」『教育時報』7—7 1955
- 小仁所左門 「茨城県行方郡玉造町沖洲三味塚古墳にゆかりの深い周辺の古墳群について」『古代常総文化』18 常総古文化研究会 1958
- 大塚初重 「茨城県行方郡三味塚古墳」『日本考古学年報』8 1959
- 後藤守一・斎藤忠・大塚初重・川上博義 『三味塚』茨城県 1960
- (16) 西宮一男 「古墳総覧 附関の台第9号墳・面の井第5号墳石棺調査報告」『谷田部町文化財調査報告Ⅰ』谷田部町教育委員会 1960
- (17) 國學院大学穴塚調査団 『常陸穴塚発掘調査概要』1971
- 國學院大学穴塚調査団 『常陸穴塚』1971
- (18) 伊東重敏・川崎純得 『花園壁画古墳第3号墳調査報告』岩瀬町文化財調査報告書第7集 岩瀬町教育委員会 1985・3
- (19) 現在測量中
- (20) 茂木雅博 『関城町史』別冊史料編—関城町の遺跡 関城町 1988・3
- (21) 今井堯 『結城市史』第四巻 古代中世通史編 結城市 1980・10
- (22) 大森信英 『石下町史』石下町 1988・3
- (23) 阿久津久 「瓢箪塚古墳」『広報三和』猿島郡三和町 1988・6
- (24) 川崎純得他 『茨城県大平古墳』大平遺跡郡調査会 1986・3
- (25) 11田中宏治に同じ
- 茂木雅博 「茨城の古墳」『えとのか』28 1985・10
- (26) 高根信和 『常陸一騎山』大宮町教育委員会 1974・3
- (27) 瀬谷昌良他 『スプリングフィールズゴルフクラブ造成に伴う小栗地内遺跡群発掘調査報告書—丑塚古墳群・寺山古墳群・裏山遺跡』茨城県協和町文化財調査報告書第Ⅰ集 協和町小栗地内遺跡調査会 1986・3
- (28) 増田精一他 『筑波古代地域史の研究—昭和54~56年度文部省特定研究経費による調査研究概要』筑波大学 1981・3
- (29) 阿久津久他 『小森明神古墳—里美村のむかし』里美村 1979・3
- (30) 瓦吹堅他 『高寺2号墳』西茨城郡友部町高寺2号墳調査団 1976・3
- (31) 高井悌三郎 「古郡台原古墳」『常陸国新治郡上代遺跡の研究Ⅱ』甲陽史学会 1988・1
- (32) 鈴木裕芳 『久慈吹上』日上市教育委員会 1981・1
- (33) 阿久津久 『仲山古墳3号墳発掘調査報告書』大子町史料別冊Ⅶ 大子町史編さん委員会 1986・1
- (34) 大塚初重他 『茨城県勝田市銚ノ宮古墳群発掘調査報告書』勝田市教育委員会 1972・3
- (35) 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—塚原古墳群』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅹ 茨城県教育財団 1981・3
- (36) 諸星政得他 『舟塚山周辺古墳群発掘調査報告書1』石岡市教育委員会 1977・3
- (37) 西宮一男他 『土浦市烏山遺跡群—土浦市烏山住宅団地造成用地内埋蔵文化財2・3次調査報告書』茨城県住宅供給公社 1975・3
- (38) 『茨城県史料—考古資料編 古墳時代』茨城県 1974・2
- (39) 並木享他 『根小屋古墳群—4号墳・13号墳発掘調査報告書』行方郡麻生町教育委員会 1985・10

- (40) 茨城考古学会 『茨城県鹿島郡鹿島町宮中野古墳群調査報告』茨城県教育委員会 1970・3
茂木雅博 「常陸南部の古墳群—宮中野古墳群」『古代学研究』第60号
- (41) 茂木雅博 「堂目木一号墳調査報告」『茨城考古学会』1 1978
- (42) 『科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財報告書』茨城県教育財団文化財報告書
第22集 茨城県教育財団
- (43) 黒沢彰哉 『舟塚山古墳群（10・12号墳）発掘調査報告書』石岡市教育委員会 1978・3
- (44) 小室勉 『常陸太田市瑞竜町瑞竜古墳群発掘調査報告』常陸太田市教育委員会 1987・3
- (45) 齊藤忠 『茨城県那珂郡平磯町三ツ塚古墳群調査報告書』1951
茨城県教育委員会 『那珂郡平磯町三ツ塚古墳群調査報告書』1952
大森信英 『茨城県那珂湊市三ツ塚古墳』『日本考古学年報』10 1963
井上義安 『茨城県水産試験場敷地内遺跡調査報告書』那珂湊市教育委員会 1969
大場磐雄 「平磯町三ツ塚古墳群に就いて」『平磯町六十五年史』1972
中島寿雄 「平磯町三ツ塚古墳群調査概況」『平磯町六十五年史』1972
- (46) 7に同じ
- (47) 汀安衛他 『梶山古墳報告書』大洋村教育委員会 1981・2
- (48) 高根信和 『塔宮台1号墳調査報告』鉾田町文化財調査報告書第1輯 鉾田町教育委員会 1979・3
- (49) 田口崇他 『木滝台遺跡 桜山古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿島町の文化財第6集 鹿島町木
滝台遺跡発掘調査会 日本文化財研究所 1978・3
- (50) 『榎山古墳群発掘調査報告書』潮来町教育委員会 1981・3
- (51) 増田精一他 『武者塚—武者塚1号墳発掘調査速報』新治村教育委員会 1983・7
増田精一他 『武者塚古墳』新治村教育委員会 1986・3
- (52) 28に同じ
- (53) 27に同じ
- (54) 20に同じ
- (55) 塙瑞比古 「常陸国関本町上野の古墳及発掘遺物」『武蔵野』20—3 1933
- (56) 齊藤弘明他
- (57) 『栗山矢尻古墳発掘調査報告書』八千代町教育委員会 1976・3
- (58) 中塚発夫他 「茨城県水海道市羽生町七塚古墳群の調査」『上智史学』6 1961
上智大学史学会 『茨城県水海道市七塚古墳群の調査』1962
上智大学史学会 『茨城県水海道市七塚古墳群の調査』1963
- (59) 11に同じ
- (60) 阿久津久 「仲山古墳群の成立」『大子町史』通史編 上巻 大子町 1988・3
- (61) 辻村純代 「箱式石棺に葬られた人々—『同棺複数埋葬』と『二次葬』をめぐって」『考古学ジャー
ナル』307 1989
- (62) 市毛勲 「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』4号 1966
- (63) 茂木雅博 「箱式石棺の編年に関する一試論—霞ヶ浦を中心として」『上代文化』第36輯 1967
- (64) 「所謂『変則的古墳』の分雄について」『茨城考古墳』第2号 茨城考古学会 1969
- (65) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』1987年を中心として、市町村教育委員会発行の遺跡地図や、
『茨城県史料』考古資料編 古墳時代 1974年 茨城県 等から補足した。
- (66) 金井塚良一 『古見の百穴 北武蔵の横穴墓と古代氏族』1986年 教育社
- (67) 甘粕健・久保哲三 「10 関東」『日本の考古学』Ⅳ古墳時代（上）1966年 河出書房新社
- (68) 佐藤政則ほか 『久慈千福寺下横穴墓群』日立市文化財調査報告書第14集 1985年 千福寺下横
穴墓群発掘調査会
鈴木裕芳ほか 『千福寺下横穴墓群 第2次発掘調査報告』日立市文化財調査報告第16集 1986年
日立市教育委員会
- (69) 佐藤政則ほか 『日立市赤羽横穴墓群発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第16集 1977年 日
立市教育委員会
鈴木裕芳・片平雅俊 『赤羽横穴墓群B支丘1号墓の調査—付篇西大塚古墳群』日立市文化財調査
報告第17集 1987年 日立市教育委員会
- (70) 『身隠山横穴墓群調査報告』1971年 常陸太田市教育委員会

- 佐藤次男 「身隠山横穴墓群」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代 1974年 茨城県
- (71) 大森信英 『常陸太田市幡町幡横穴古墳調査報告』1966年 常陸太田市教育委員会
大森信英 「幡横穴群」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代 1974年 茨城県
- (72) 『幡山遺跡発掘調査報告』1977年 常陸太田市教育委員会
- (73) 大森信英 「猫淵横穴墓群」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代 1974年 茨城県
- (74) 『十五郎横穴墓群調査概報』1976年 勝田市史編纂委員会
佐藤次男 「十五郎横穴群」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代 1974年 茨城県
- (75) 馬目順一ほか 『中田装飾横穴』1974年 いわき市教育委員会
- (76) 大谷純仁ほか 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』静岡県文化財調査報告書第10集 1971年
静岡県教育委員会
- (77) 池上悟 『横穴墓』考古学ライブラリー6 1980年 ニューサイエンス社
- (78) 大森信英 「権現山下横穴群」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代 1974年 茨城県
- (79) 斉藤忠 「かんぶり穴横穴群」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代 1974年 茨城県
- (80) 71と同じ
- (81) 73と同じ
- (82) 大塚初重 「壁画のある横穴墓の系譜―虎塚古墳を中心として―」『歴史読本』昭和50年7月号 1975年 新人物往来社
- (83) 6と同じ
- (84) 高根信和 「常陸国山吹山の特殊構造を有する横穴」『若木考古』第56号 1960年 國學院大学考古学会編
大森信英 「山吹山古墳」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代 1974年 茨城県
- (85) 瓦吹堅 「北茨城地方の古墳と横穴」『北茨城市史』上巻 1988年 北茨城市史編纂委員会

本論の執筆は1, 2, 3, まとめが阿久津, 4が片平である。

阿久津 久 (茨城県教育財団 国立歴史民俗博物館特定研究協力者)

片平 雅俊 (十王町教育委員会)

Aspects of Tumuli in the Later Kofun Period
in Hitachi

AKUTSU Hisashi KATAHIRA Masatoshi

In the first half of the 6th century two areas in Ibaraki Prefecture came to show distinctive characteristics: one area being the region centering on Lake Kasumigaura, the other being the western and northern parts of the Prefecture. Near Lake Kasumigaura, box-type stone coffins, as seen at the Sanmaizuka Tumulus, were used for the first time in the burial mounds.

This type of stone coffin became the most common, being placed in both the later keyhol-shaped burial mounds (square at the head and rounded at the foot) and round burial mounds. In areas with this tradition, a few tumuli have distinctive tunneltype stone rooms; some are keyhole-shaped tumuli, including the Kazegaeshi-Inariyama Tumulus in Dejima Village, the Karabitsu Tumulus at Taishi (with colored wall painting), and the Dainichizuka Tumulus in the Okisu Tumuli Group, which is close to the Sanmaizuka Tumulus; as well as the round shaped Maeyama Tumulus in Sakuragawa Village.

On the other hand, in the region from the northern to western areas of the Prefecture, the adit-type stone room is the most common in both keyhole-shaped and round tumuli; but a small number of box-type coffins and some cave-type graves are also seen. A box-type stone coffin is found in the keyhole-shaped Nakayama Tumulus No. 3 in Taishi Town, on the upper reaches of the Kuji River; however, the tumuli group to which this belongs is considered to have been influenced by the Nasu Region.

Square burial mounds with adit-type stone rooms, and sometimes with mural paintings, appeared in both the latter classification given above and in the Tsukuba region in the first half of the 7th century. Examples include the Funadama Tumulus (with colored mural painting) in Sekishiro Town in the province of Niihari; the Sadogaiwaya Tumulus in Tsukuba City in the province of Tsukuba; and the Yoshida Tumulus (with line mural drawing) in Mito City in the province of Naka. In addition to the above, some have special characteristics, for example, the adit-type stone room of the Torazuka Tumulus in Katsuta City, which was remodelled and colored at a later date; and the Kanburiyana cave-type grave in Hitachi City, which is decorated with colored mural paintings.

At the same time, a group of tumuli was built along the Koise River which runs south of Ishioka City, capital of the province, on the border with Chiyoda Village. The shapes of tumuli were varied, from round to deformed small keyhole-shapes, and the box-type stone coffin was the most common. In the Hirasawa-Yamaguchi District, where the Sadogaiwaya Tumulus is located, tunnel-type stone rooms and box-shaped adit-type stone rooms are seen in round tumuli. This box-shaped adit-type stone room is common to the underground box-shaped adit-type stone room in the Mushazuka Tumulus in Niihari Village, and the Ishikurayama Tumulus in Tsuchiura City. This

shape is also seen in the Awata-Kuriyama Group Tumuli in Chiyoda Village.

These all appeared in the second half of the 7th century. Evidence of the fact that the capital of the province of Hitachi was placed at Ishioka can be sought in these tumuli groups of the final Kofun Period.